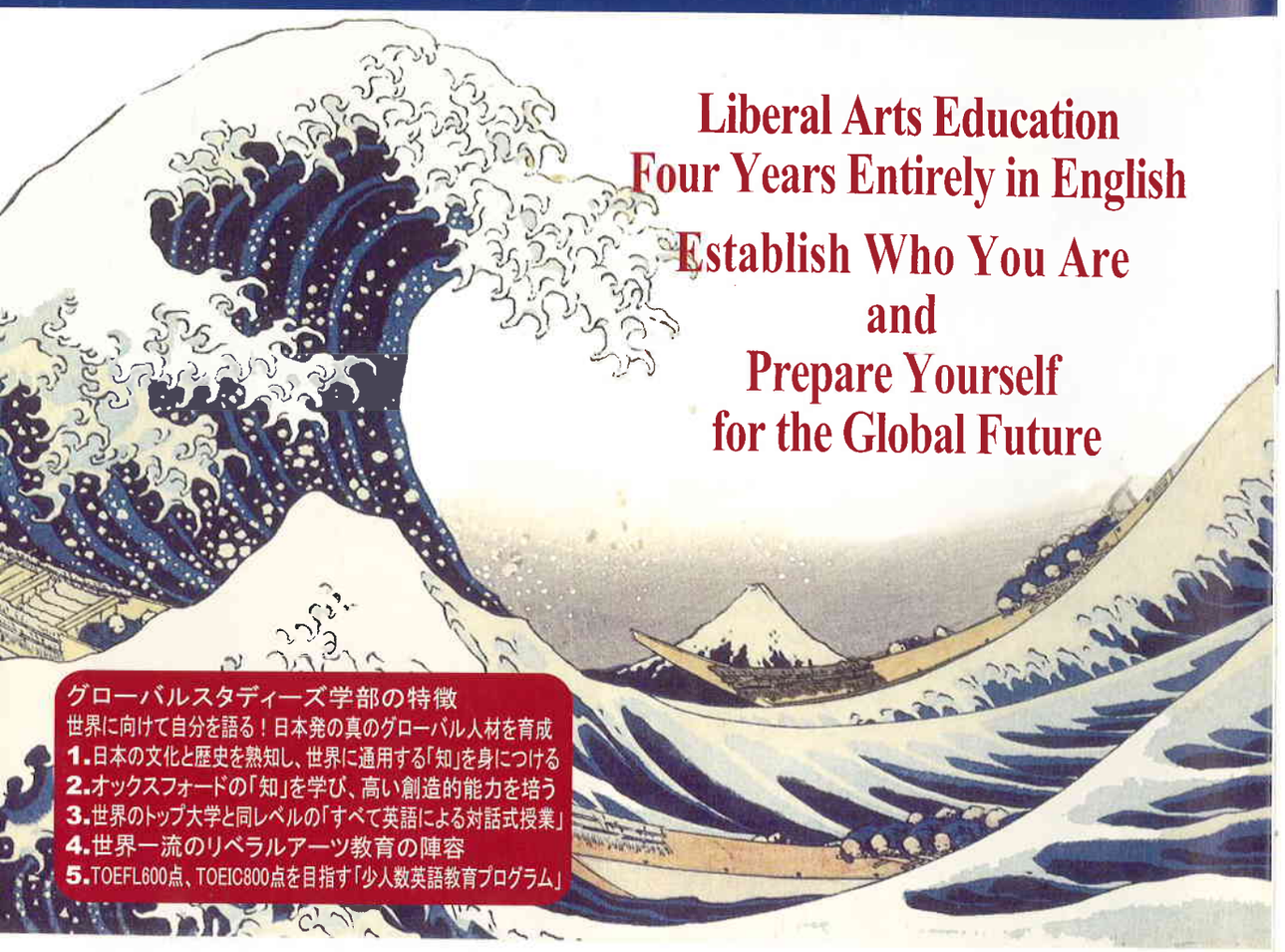
Tama University School of Global Studies



Liberal Arts Education
Four Years Entirely in English
Establish Who You Are
and
Prepare Yourself
for the Global Future

グローバルスタディーズ学部の特徴

世界に向けて自分を語る！日本発の真のグローバル人材を育成

1. 日本の文化と歴史を熟知し、世界に通用する「知」を身につける
2. オックスフォードの「知」を学び、高い創造的能力を培う
3. 世界のトップ大学と同レベルの「すべて英語による対話式授業」
4. 世界一流のリベラルアーツ教育の陣容
5. TOEFL600点、TOEIC800点を目指す「少人数英語教育プログラム」

2007年度入学試験

●ＡＯ入試―試験科目は論文(日本語でも英語でも可)と面接(集団)。
各種英語試験の得点等による実績加点制度があります。

試験の区分	出願期間	試験日	合格発表
ＡＯ入試	2月13日(火)～3月6日(火)	3月9日(金)	3月13日(火)

求める学生像：グローバルスタディーズ学部の理念に適う以下の人材

1. 何事においても「やりぬく意志」があること
2. 国際的に活躍したいという強い意欲を有していること
3. 自発的なコミュニケーションスキルを身につけることの重要性を認識していること
4. 日本の歴史・文化・宗教に強い関心を有していること

●一般入試―試験科目は英語のみ(出題は日本語、英文読解問題)。

試験の区分	出願期間	試験日	合格発表
一般入試(Ａ日程)	1月9日(火)～1月29日(月)	2月4日(日)	2月10日(土)
一般入試(Ｂ日程)	2月13日(火)～2月23日(金)	2月27日(火)	3月3日(土)

★入試会場　代々木ゼミナール湘南キャンパス
(JR・湘南モノレール大船駅東口より徒歩３分)
★検定料　30,000円

●９月入学生の入試―帰国生・国際学校生の特質を生かすことのできる英語による入試です。
試験日等詳細については下記へお問い合わせください。

帰国生・長期海外滞在経験者のあなたを招く！

- **Entrance Exam. availiable for returnee students entering in Sept. 2007.**
- **Students returned more than a year ago also eligible.**

特待給費生制度

AO入学試験及び一般入学試験に出願し、高得点で合格された方に、授業料相当額の奨学金を最短修業年限(4年間)給付する制度があります。希望者は願書提出の際に所定の用紙で申請してください。但し、特待給費生に採用された場合は、必ず本学に入学することが条件となります。

多摩大学グローバルスタディーズ学部　(2007年4月新設)

所在地●〒252-0805神奈川県藤沢市円行802番地　**Web: http://sgs.tama.ac.jp/english/**
問い合わせ先●**Phone:03-3712-2817 FAX:03-3712-2847　E-mail:miyanaga@tama.ac.jp**

TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション

NEWSLETTER

No.19
December 2006

総　会

目　次

ページ

1. 長坂会長ご夫妻インタビュー ……2

2. フルブライト上院議員生誕100周年記念募金発起人会
　2－1. 発起人会報告 ……5
　2－2. 発起人会に寄せて ……7
　2－3. 募金状況中間報告 ……8

3. 2006年度総会報告
　3－1. 青木昌彦教授講演 ……10
　3－2. 総会報告および決算 ……13
　3－3. 新役員紹介 ……15

4. ご紹介－ガリオア・フルブライト沖縄同窓会の巻 ……17

5. 各種イベントの報告
　5－1. フルブライト上院議員生誕100周年記念コンサート ……18
　5－2. 第31回日米交流チャリティ・ゴルフ大会 ……20
　5－3. ホスピタリティ委員会活動 ……21
　5－4. J-FMFへの協力 ……25
　5－5. セミナー（勉強会）報告 ……26

6. 米国フルブライト・アソシエーション第29回大会報告 ……28

7. 東京フルブライト・アソシエーション沿革 ……29

8. 日米教育交流振興財団の状況 ……30

9. 2006年度奨学生リスト ……31

10. 事務局からのお知らせ ……32

長坂会長ご夫妻インタビュー

江端貴子 パブリシティ委員会副委員長
1990 M.I.T.

この4月に東京フルブライト・アソシエーション会長にご就任された長坂会長にフルブライト留学の思い出、会長としての抱負を語っていただいた。長坂会長の奥様もフルブライターということで同席していただき、ご一緒にお話を伺った。

貧乏だけど充実した毎日

長坂会長： 家内とはフルブライトでは同期ですが、それぞれ別の大学で勉強する前にオリエンテーションコースがありました。私どもはたまたまアリゾナ大学、アリゾナ州テューソンという町で、語学研修を2か月受けました。

長坂夫人： 夏のアリゾナですから、テューソンに着いて一歩外に出た途端、ものすごい暑さに驚きました。まるでオーヴンの中に入った様で、こんな所でとても生きて行けないんじゃないかと、ショックでした。

長坂会長： 私がニューヨークのコロンビア大学で、家内がシカゴのイリノイ大学、両方とも大都会へ偶然配属になって、緑豊かな地方都市だといいのでしょうが、都会っ子がまた都会へ行くというようなことでしたね。

私の一番の思い出は、とにかく恐ろしく貧乏だったことですね。地域によって金額が違うのですが、当時はフルブライト奨学金としては一番多くて月120ドルいただけました。もちろん大学の授業料は別ですが、120ドルからボーディングも払うことになります。ところが、ボーディング代がニューヨークは食費も含めて高いですから、60ドルぐらい、あと残るのが60ドルぐらいしかない。これでは、ろくに本も買えなくて、もっぱら図書館にこもりきりでした。コロンビア大学の場合は、大学院の学生に、図書館の中へ自由に入れるという通行証をくれます。そうすると、暗い図書館の中で、スタンドがついている机に座ることができます。自分で好きな所から本を持ってきて、借りる手続きなど無しで、勉強をして、また元に返しておく。これはとても恵まれていました。

長坂夫人： 私は往復旅費を、フルブライトで支給していただきました。奨学金は、大学からティーチングアシスタントシップを受け、200ドル／月もらっていました。そのうち、ドーミトリーの生活費として100ドル／月を支払いました。私は、イリノイ大学の大学院薬学部化学科でしたので、ティーチングアシスタントとしての仕事は、主として、学生実習の手伝いと、試験の採点でした。1週間に20時間程、仕事の為に拘束されました。

勉強で一番のストレスだったのは、入学後、まだ4～5ヶ月でしたのに、ジャーナルクラブの報告責任が廻って来たことでした。まだ英語力も乏しく、ジャーナルを読みこなすことさえ必死でしたし、説明などの自信はありませんでしたので、発表の部屋の三方側面にある大きい黒板全部を使って、担当した論文の内容を書き得る限り書いて、説明は簡単な英語で出来るように徹夜で準備しました。とにかく薬学部の教授が全員出席されたので、大変緊張しましたが終ったあと、私のアドバイザープロフェッサーが「出来たじゃないか」といって喜んで下さり、私も本当に嬉しかった事を思い出します。また、大学では大変結構な豊かな研究環境を与えられていました。ドーミトリーでは牛乳飲み放題でした。

帰国と同時に母大学では副手から助手に昇格して薬理学教室勤務となりました。結婚を期に退職、後に22年振りの復学の日まで主婦業に専念しました。その間に、あるイネ科植物の成分検索をしたいという欲求にかられ、これが後に懸案のテーマとなり、同教室に入室が許されました。以来、父の遺産を元手として又、家族の同意も得て、研究生活を続けております。

これまで多くの良き指導者に会い、Ph.D.（med.）受領も果しました。私自身も努力に努力を重ねての厳しい年月を過しましたが、いうならばフルブライトのお陰で幸運をいただきました。フルブライト留学生だったという自負と、にもかかわらず志、半端にして帰国したという無念さが、私の心のどこかにひそんでいて、それが力になって、私の研究テーマに対する思い入れがより深くなっているという気がしております。

長坂会長： 私は文化系の人間ですので、学友たちとディスカッションできるのがありがたかったですね。議論が白熱してくると、みんな早口になるし、なかなかそこへ割って入って、待て、待て、それは違うなんて言っても聞かない。それで口が達者になりました。当時フルブライト留学制度以外は、原則としてはありませんでした。例外として輸出企業が、輸出したお金の一部を自分の会社の留学生の費用に充てるというのが、わずかに認められただけです。本当に特別許可が必要だった時代です。1ドル360円時代で、やみドルというのが400円ぐらいであるんです。

まだ円が弱い時代ですから。為替管理は、日本銀行が、円とドルとの交換を、特別許可を出して行っていました。やみドルを買えば、もう少し生活はましにはなるのですが、日本銀行の職員がやみドルを買ったというわけにはいかないので、私は、もう歯を食いしばって貧乏所帯で我慢していました。

その貧乏の思い出と言いますと、コロンビア大学は丘の上にあって、丘の下へおりてくと、ハーレム、最近は随分よくなったそうですが、当時は貧民街の代表のような場所でした。そのハーレムへ行きますと、学生食堂よりハンバーガーなどが安い。それから、歯磨きなども大学の購買部よりも安い。当時は私だけではなくて、アメリカ人もみんな貧乏で、20歳代の若者が数人肩を組んで、その貧民街へ下りていくわけです。昼休みになると、ハーレムでご飯を食べて、買い物をして帰ってくるという、貧乏人にとっては最適の生活をしていました。

キューバ危機で議論した国際問題

長坂会長： もう一つの大きな出来事は、ちょうどわれわれがいたときに、例のキューバ危機が起こったことです。当時のソ連がキューバへミサイルの材料を持ち込むということでしたが、これは、ケネディ大統領の決断で海上をブロックしたのです。それについて、私どもは国際関係論の専攻ですから、食堂でも教室でも議論が沸騰しました。国際法上は、あのブロックの正当性はあまりないと思います。しかし、ソ連の船は、米国の艦隊がブロックしているのを見て、引き返しました。それを見て、国際関係を決めるのは国際法だけではないという思いを深くいたしました。歴史に「もし」は禁句ではありますが、もしソ連が強行したら、米国艦隊が恐らく撃沈したでしょうし、冷戦が一気に熱い戦いに転ずる可能性があったと思います。米ソの軍事力がどの程度拮抗していたかはわかりませんが、いざ第三次世界大戦のぼっ発かという緊張感がありました。みんなと議論するのが非常に面白かったですね。

長坂夫人： 私の場合、専門が全く違いますから状況をよく理解出来ていなくて、のんきなものでした。まわりの方達も落着いておられたように思いました。逆に、日本にいた父が非常に心配しまして「何かがあったらすぐに領事館に行くように」と電話をかけて来ましたね。

長坂会長： 当時はまだ大学はアメリカ人中心で、フルブライトでヨーロッパの人が少し来ている程度でした。もちろん日本人もほとんどいなかったですし、日本料理店も電話帳で調べてみるとニューヨークでは2軒しかないという時代でした。アリゾナで一緒だった仲間も、あちこちに散らばると、お互い音信不通で、日本へ帰ってきて何年かしてから、フルブライトの同窓会等があって、だんだん、誰がどこにいるなんてことが分かってくるという状態でした。しかも、私どもは転勤族でしたから、皆さんと連絡が取れるようになったのは、相当いい年になってからでした。

フルブライトにビジネスの人は少なかったですね。当時は、ジャーナリスト枠や芸術家枠はありましたが、ビジネス枠は特になかったと思います。学識経験のない人間は真っ先に落とされてしまいますから、学者の先生が多かったですね。

長坂夫人： アリゾナでは、長坂もそうだったと思いますが、まず英語力のテストがありました。クラス分けの為の試験でした。大学の先生方やビジネス関係の皆さんはAクラスに入られましたが、私はDクラスに配属されました。クラスは更にEクラス、F、G、H－とありましたので、私などが、Dクラスに入れたのは、不思議に感じていました。同じクラスの皆さんが、私よりずっとレベルが高いと感じ

ていました。考えれば、私の場合、小さい頃から、家で父が、英語やドイツ語の本を、声を出して、よく読んでいたのを覚えていますので、その発音が耳に入っていたことが幸いして、発音のテストなどでは大分、お点を稼いだのではなかったかと思います。

長坂会長： フルブライト留学生は非常にバラエティーに富んでいて、いろんな人がいて面白かったですね。でもニューヨークへ行ったら、日本人なんてほとんどいなくなってしまいました。

長坂夫人： イリノイ大学シカゴキャンパス化学科では、2人でした。1人は10年以上在籍されていた方でした。

長坂会長： 日本人の少ない時代ですね。ベトナム戦争前、ケネディ暗殺前ですから、非常に古きよき時代でした。

フルブライトスピリットを繋いでいく

長坂会長： フルブライト上院議員が最後に日本へお見えになったとき、国際文化会館でパーティーがありまして握手をさせていただきました。それが最後でした。フルブライト上院議員の自伝を拝見すると、外交問題を活動の中心に据える人は上院の中でも傍流ということのようです。しかしフルブライト上院議員のまいた種は、これだけ世界で実っているのですから、素晴らしいことですね。

フルブライト上院議員がきっかけを作ってくださった、そして日米両国政府が引き続きこれにご理解を示していただいて、こういうプログラムを続けた、これは素晴らしいことだと思います。しかし、やはりこういう事業は長く続いて、草の根レベルに広がらないとだめですね。一部の人がちょっとやっているとか、あるいは短期間だけやっているというのは、こういう事業の性格上あまり効果がない。ニューヨークのトレードセンターが攻撃を受ける、それからアフガニスタン、イラクでこういうことになるなど、相変わらずテロと武力の応酬が続くという状況の下で、遠回りなのでしょうが、一番力強いのは人材の交流だろうと思いますね。

その意味で、両国政府からも引き続きご支援をいただいており、ありがたいことだと思いますが、それだけではちょっと不十分です。留学で大変素晴らしい経験、その後の人生観を大きく左右するような経験をさせていただいた者としては、何とか次の世代のかたにも、こういう経験をしていただけるように努力したい。その思いを具現化しているのが、第一にこのフルブライト同窓会自身の日常の活動であり、第二に募金活動だと思います。

一つ目のフルブライト同窓会の活動というのは、もちろん同窓会である以上会員相互の交流と相互啓発が大切ですが、ただフルブライトの同窓生が集まって、お茶を飲みながら昔話をしているというだけでは発展がありません。アメリカからおいでになる人、これからアメリカへ行かれる人、こういう方々と一緒にお話をさせていただいて、私どもの思いを伝えるということ、それから、当然海外からお見えになった方には、私どもがアメリカでいただいたような親切をお返しする、そういうことがフルブライト同窓会の存在意義ではないかと私は思っています。そういう線に沿って活動を強化していければ、というのが、会長としての抱負であり、願いです。

アメリカからおいでになった方には、歓迎会だけでなく、鎌倉にご案内をしたり、日光へご一緒したり、いろいろな形で接触の機会を設けています。これをもっと盛んにしたいと思います。一方、日本からアメリカへ行かれる方たちは、決まってからすぐ出発されてしまいますが、そまでの短い時間に何か私どもでできることはないかと考えています。また、横の広がりも大事ですが、縦といいますか、特に若いかたを巻き込むことをしていきたいとも思います。

二つ目の募金活動ですが、やはり両国政府のお金だけでは留学生の数（03～04年で米国へ80名、米国から67名、計147名）にも限りがありますから、何とかこれを振興したいと思います。今、私どもが企業・個人を含めた民間の基金を集めても、やっと韓国（03～04年で米国へ62名、米国から92名、計154名）と同じ程度、ドイツ（03～04年で米国へ282名、米国から274名、計556名）よりはるかに遅れているということですから、何とかひとふんばりしたいものです。せめて、今回の募金活動は最低限目標を達成したいと思っています。フルブライト募金では今2億円を目標にしていますが、息の長い、地味な事業の継続に意味があるわけですから、企業のトップの方々にはぜひご理解いただきたいと思っています。

またフルブライトシップの重要性を伝えていきたいですね。いろんな奨学金があっていいんですけれども、このフルブライトは、非常に公平にかつ組織的にいい人材を選んでいます。これが強みだと思います。フルブライトは、日米教育委員会が厳格公正な選考を行っていますから、ここへ皆さんの善意を集中していただきたいと願っています。

フルブライト上院議員生誕100周年記念募金発起人会

石澤靖治 パブリシティ委員会委員長
1988 Harvard U.

6月6日、シティークラブ・オブ・東京において、「フルブライト上院議員生誕100周年記念募金発起人会」が開催された。司会を日米教育委員会事務局長のデビッド・H・サターホワイト氏が行う中、初めにこの募金活動の発起人会代表の大河原良雄・元駐米大使が挨拶を行った。この中でガリオア奨学制度3期生でもある大河原氏は、今回の募金の趣旨を説明。次いで小坂憲次文部科学大臣からの祝辞を同省大臣官房国際課長の渡辺一雄氏が代読した。そして発起人の一人であるトヨタ自動車副会長の張富士夫氏が乾杯の発声を行う中、募金の成功を祈るパーティーがとり行われた。

これまで日米の留学生8000人以上に奨学金を支給し、日本とアメリカとの架け橋になってきたフルブライト計画だが、今回この計画を民間資金で強く支えるべく募金活動を行うものだ。

昨年がフルブライト上院議員生誕100周年にあたったことで、世界各国で各種の記念行事が行われる中での特別な意味合いもある。日本ではすでに昨年ハリエット・フルブライト夫人の来日記念レセプションや今年2月に記念演奏会などを行ってきたが、ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会、日米教育交流振興財団および日米教育委員会が一体となって大々的に募金活動を行おうというものである。企業・団体募金は、2億円を目標とし（一口百万円、募集期限2008年3月31日）、集まった募金は40人のアメリカと日本の留学生の奨学金支給にあてる。5口以上の企業・団体募金にご協力くださったところには、従来どおりその企業名もしくは団体名を冠した奨学生を置く。

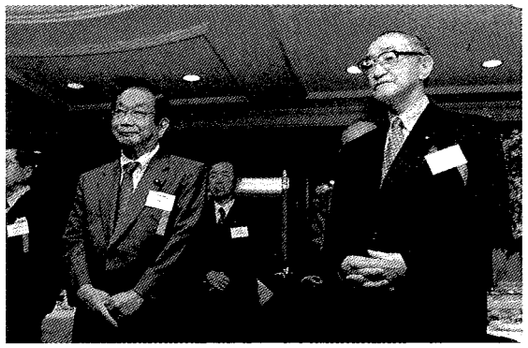
そのような意気込みを反映して、当日は、ウィリアム・モーガン米国大使館広報担当公使、津島雄二・元厚生大臣、大野功統・元防衛庁長官、畠山襄・国際経済交流財団会長、橋本徹・ドイツ証券東京支店会長、丹羽宇一郎・伊藤忠商事会長、吉野浩行・本田技研工業取締役相談役、服部禮次郎・和光会長、小枝至・日産自動車共同会長、ロバートF.グロンディン・ホワイト＆ケースLLPパートナー、ダグラス L. ピーターソン・シティバンクN.A.CEO、ティエリー・ポルテ新生銀行社長など、日米両国の政界・官界・経済界を代表する方々が発起人として参集された。いうまでもなく、ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会の現・前会長の長坂健二郎、開原成允の両氏も顔を揃え、盛大な席となった。

またこれに先立って、別室で今回の募金活動について日本の主要なメディアを招いて記者会見が行われた。この席では長坂健二郎・ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会会長、賀来景英・日米教育交流振興財団理事長と、東京フルブライト・アソシエーションのファウンデーション・リエゾン委員長である金田新氏が、説明を行った。

そしてこの記者会見の内容は、共同・時事通信では当日夜に配信され、17の地方紙に加えて、Yahoolやexciteなどのインターネットポータルサイ

トでも報じられた。全国紙では読売、毎日、産経、日経、朝日が翌7日と17日に一般記事として、読売はさらに16日の「顔」の欄で、発起人代表の大河原良雄氏の人物像を日米関係の視点からクローズアップして報じた。また英字紙でも7日にジャパン・タイムズに今回の募金についての記事が掲載され、この募金活動の社会的意義の高さを評価していることが十分にうかがわれた。

なお、同窓会による個人募金は1982年以来、5年ごとに計5回実施されてきた。今回は6回目の募金年にあたる2007年を1年前倒しして「フルブライト上院議員生誕100周年記念—第6回個人募金」として行い、目標額は1億円（一口一万円以上、募集期限2007年9月30日）で、米国人留学生の受け入れを継続的に行うための費用とする。



「フルブライト上院議員生誕100周年記念募金」発起人会祝辞

この度「フルブライト上院議員生誕100周年記念募金」を発足され、本日ここに盛大に発起人会が開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

また、この度の募金発足に際し、本日の発起人会にご参集の各界の皆様、日米教育委員会、財団法人日米教育交流振興財団、ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会などご関係の皆様のご尽力に対し、深く敬意を表します。

日米の交流が始まって150年余り、両国は最良の関係を築き上げるに至りましたが、世界が直面している諸課題に日米が協力して立ち向かうために、日米のあらゆるレベルと分野で相互理解を深めて行くことが、益々重要となっています。

フルブライト交流計画は、1951年に発足して以来、両国の関係が成熟する中で、一貫して人物交流を通じた日米間の相互理解、ひいては国際社会の平和構築に貢献する、数多くの素晴らしい人材を輩出して参りました。現在フルブライターと呼ばれる、日本人約7000名、米国人約2300名の同窓生の多くは、今日、政治、教育、行政、法曹、ビジネス、マスコミ等の分野の第一線で活躍されており、フルブライト交流計画は益々その存在意義を増してきています。

「世界平和を達成するためには、人と人との交流が最も有効である」という確固たる信念の下、「フルブライト教育交流計画」を提唱した、故J・フルブライト米国上院議員の生誕を記念する「フルブライト上院議員生誕100周年記念募金」が、同氏の崇高な理念と意思を引継ぎ、一人でも多くの両国の将来を担うリーダーを育成する新たな礎となりますことを心より期待し、ご列席の皆様のいよいよのご健勝ご活躍を祈念して、お祝いのご挨拶と致します。

2006年6月6日

文部科学大臣　　小坂　憲次

発起人会に寄せて

留学の思い出

佐藤ギン子　副会長
1963 Cornell U.

経済白書が「もはや戦争ではない」と宣言して数年経っても日本は貧しかった。為替レートは1ドル360円の固定相場、私費留学や観光旅行は夢のまた夢という時代だった。だからアメリカ留学を志す若者は、フルブライト留学生試験に殺到した。

全くの幸運によって合格した私は、カンザス大学でオリエンテーションの後、コーネル大学で学ぶ機会を得た。カンザス大学での朝から晩までの授業、寮での宿題漬けの日々の後、やっと到着したイサカ空港でホスト・ファミリーの女性に迎えていただいたのには感激した。コーネル大学の教授方は勿論、事務局や寮の管理人のガイダンスは懇切丁寧だったし、大学の諸施設も広々として美しく、日本の母校の殺風景な教室を思い出し、彼我の差を痛感した。

日本では見られなかったハイウェイが完備し、各家庭に車やセントラルヒーティングが備わっているアメリカの豊かさに圧倒された。日本からの留学生や教授方と出会えば、主な話題は日米の様々な面での差や日本を豊かにする方策だった。外国に住み、外国人と付き合うことは、日本を考えることである。当時、フルブライト留学生として渡米した若い日本人が、概ね親米感情を持って帰国後に各界で活躍したことは、長期的に見て日米関係にとって良い結果を招いたといえよう。

真の国家間の友好親善関係は、国民1人1人の交流によってこそ促進されると思う。フルブライト留学制度の恩恵を受けた私共が、1人でも多くのアメリカ人を招けるよう努力しようではありませんか。

（財団法人女性労働協会会長）

フルブライト議員への感謝

八幡惠介
1960 Syracuse U.

このたびフルブライト議員生誕100年を記念して設立された個人募金委員を仰せつかり、この機会に寄付の意義を考えてみたいと思います。寄付をする動機には余分の資産があるから、人道上の理由から、災害など被害を受けて必要としている人がいるから、などがあるでしょう。我々フルブライターは多かれ少なかれフルブライト議員立法になる米国の奨学金をもらって留学し、大学と地域の人たちからいろいろな恩恵を受けました。その結果は単なる学問と学位だけではなく、この奨学金をもらっていなければ経験できなかったことを身につけることができたはずです。滞米中の行動によって経験の多寡はあっても、フルブライト議員への感謝の気持ちを持たない人はいないと信じます。

私は留学先に加えてその後交流のあった他の大学などの関係者と話す機会が多くありましたが、異口同音に言われたことは「日本の留学生は優秀だが、学問、研究という目的を達すると帰国して音沙汰なしになるケースが多い。他の国の留学生は帰国後も連絡があったり、後輩を推薦したり、など大学に何らかの貢献をすることが多い。」というもので同窓会の力が強いアメリカの影響を受けずに帰国した日本人の多いことをうかがわせます。帰国してキャリアで成功した人はほとんど例外なくなにがしかの、あるいは高額の寄付をするようです。アメリカの大学の台所が卒業生の貢献で成り立っていることも知りました。それは決して財政的な貢献だけではなく、ファカルティに対するアドバイス、経験からの講義、など汗を流した貢献も多いようです。

世界には多くの人たちが人道的な支援を必要としています。余っているものを施すのではなく、必要としている人がいるから分け合うという心が寄付の元なのです。また、フルブライト議員への感謝の気持ちも寄付の動機として大切です。この二つの心があれば、同じ経験を一人でも多くの後輩にさせてあげたい、という気持ちがわいてくるのではないでしょうか。余っているお金を施すのではなく、痛みを感じてでも感謝の心から、また必要としている人の顔を思い浮かべて持てるものを分かち合うのが寄付の心だと思います。日本に従来からある喜捨という考えではなく、人道上の寛容な心を持って他人と分かちあう気持ちに立つのです。major donationという立場を取れる個人は日本にも多くいるはずです。フルブライト奨学金で留学した人だけが今回の募金の対象ではないと思います。しかし、フルブライターが外部にまで働きかけなければ、外部の人は知りようがありませんし、フルブライター自身が高額の寄付をしなければ、外部の人にお願いするのは難しいでしょう。

（IAIジャパン理事長）

募金状況中間報告

フルブライト上院議員生誕100周年記念企業・団体募金・寄付

（2006年11月30日現在）

（単位：円または米ドル）

寄付金額	企業・個人名（敬称略）
《2005年度合計：13,905,500円》	
5,905,500	ジブラルタ生命保険株式会社
5,000,000	本田技研工業株式会社
1,000,000	株式会社ニフコ、伊藤忠商事株式会社、野村ホールディングス株式会社
《2006年度合計：38,122,600円》	
10,000,000	財団法人吉田育英会、トヨタ自動車株式会社
5,000,000	キヤノン株式会社
2,000,000	米国メルク社
1,122,600	AIGカンパニーズ日本・韓国地区
1,000,000	キヤノン電子株式会社、キヤノンファインテック株式会社、キヤノン化成株式会社、キヤノンマーケティング・ジャパン株式会社、キヤノンアネルバ株式会社、日産自動車株式会社、株式会社産業経済新聞社、アイシン精機株式会社、イー・アクセス株式会社、ハリマ化成株式会社
《個人2006年度合計：3,500,000円》	
2,000,000	匿名
1,000,000	匿名
300,000	大内　博
200,000	大野　功統
【申込分合計：17,000,000円　　$120,000】	
5,000,000	三菱金曜会、日本税理士会連合会
3,000,000	米国メルク社
2,000,000	日本電気株式会社
1,000,000	株式会社大和証券グループ本社、鹿島建設株式会社
$100,000	ジブラルタ生命保険株式会社
$20,000	AIGカンパニーズ日本・韓国地区

第6回個人募金実績表

（2006年11月30日現在）

1. 金額別集計表（円）

（単位:円）

募金額	人　数	入金額
1,000,000	1	1,000,000
100,000	21	2,100,000
80,000	1	80,000
60,000	1	60,000
50,000	33	1,650,000
40,000	3	120,000
30,000	44	1,320,000
25,000	1	25,000
20,000	133	2,660,000
10,000	290	2,900,000
10,100	1	10,100
10,000未満	40	175,000
合　　計	569	12,100,100

2. 金額別集計表（ドル）

（単位:ドル）

募金額	人　数	入金額
1000	1	1,000
500	1	500
30	1	30
合　　計	3	1,530

3. 同窓会別集計表（円）

（単位:円）

同窓会名	人　数	入金額
北海道	22	1,613,000
東　北	16	258,000
東　京	307	5,983,100
北　陸	11	185,000
中　部	29	490,000
大　阪	55	1,123,000
京　滋	38	940,000
中　国	18	400,000
四　国	29	340,000
九　州	26	535,000
沖　縄	17	193,000
海　外	2	40,000
合　　計	570	12,100,100

10万円以上　寄付者名（敬称略）

100万円　　高向　巌

10万円　　行天　豊雄　　賀来　景英　　長坂　健二郎　　長坂　淳子　　橋本　徹
和田　賢治　　亀山　博子　　田辺　龍郎　　村上　英二　　岩山　太次郎
山口　正俊　　佐藤　ギン子　　関口　恭毅　　牧野　信夫
ガリオア・フルブライト京滋同窓会
渡辺　昌昭　　川又　良也　　文野　千年男　　内古閑　俊二　　西　彰吾郎
竹内　利枝子

US$1,000.00　　林　啓一郎

※ 全ご寄付者名簿は、07年のVol. 20に掲載いたします。

東京フルブライト・アソシエーション
2006年度総会講演会

■日米・日中関係を複眼で考える
——私の経験を踏まえて■

実は、私は1960年ごろまではマルクス主義にかぶれた学生でした。60年の安保闘争というものが終わったとき、マルクス主義では今後の問題を考えるには、適当ではないんじゃないかというふうに考えるようになりました。

そこで、もういっぺん勉強をしなおしたいと思ったわけです。個人的な話になって申し訳ないですが、私は1962年に大学を卒業したということになっています。実はその後2度大学院の試験を受けたんですが、筆記試験は受かったものの、口頭試問の際に、学生運動をやっていたということが理由で落とされてしまったわけです。これでは日本の社会で勉強をし直すのは難しいと思いまして、アメリカにぜひ渡って心機一転勉強しようと考えたわけです。

それはそれとしまして、本題に入りますが、最初にフルブライト同窓会の席でこの中国の問題をなぜお話させていただくかということについてです。国会議員の方が靖国神社に参拝されて日中間の問題としていろいろと報じられる一方で、中国の胡錦濤国家主席がワシントンを訪れて、ブッシュ大統領と米中間の問題やグローバルな問題について幅広く話し合うという状況が生まれています。こうした中で日本の将来を考える上でも、あるいはこれからの国際社会の問題を考える上でも、中国に関することは非常に大きな問題になってきていると思います。

私は現在、スタンフォード大学の経済政策研究所である、Stanford Institute of Economic Policyのシニアフェローとして籍を置いていますが、そこで毎年3月に経済サミットというような会議を開いています。そこにはレーガン政権の国務長官だったシュルツや、クリントン政権の国防長官として北朝鮮の核問題に取り組んだペリーを始めとして、他にも経済諮問委員会というような重要なポストをかつてしめた人も何人かおりますし、現在の経済諮問委員会の委員長もいます。これらの人たちが一堂に会していろいろ議論をするわけですが、その年に何がテーマになっているかを見ることで、アメリカの経済社会の主要な問題がわかってくるとも言えます。

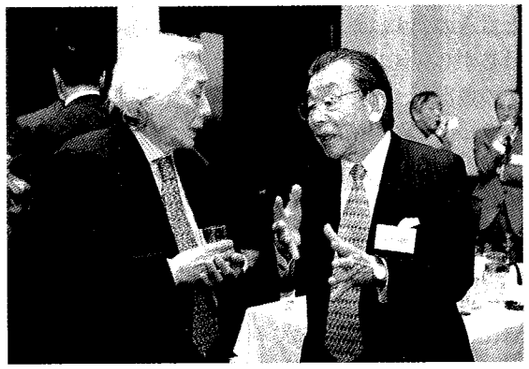
今年は三つのテーマがありました。一つはアメリカにおける財政改革です。ご承知のとおりアメリカには大変な貿易収支の赤字があり、そういう赤字をいわば外国からのお金を借りるという形でファイナンスしているという状況にあるわけです。これは果たしてサステイナブル（持続可能）かどうかですが、この問題を解決しようとすると、どうしても財政改革の問題になってくるわけです。二つめのテーマが石油価格の上昇と関連してエネルギー問題。三つめが中国問題です。二つめのエネルギー問題には環境問題も当然含まれますが、結局、お互いに切り離せない相互関連性のあるテーマであるわけです。

ところで私と中国との関わりを申し上げます。私は1975年に中国を訪れる機会を得ることができました。まだ文化大革命の最中で、中国がどん底のときでしょうか。ちょうど2月に周恩来が亡くなって、8月には毛沢東が亡くなるという年の春でした。その際に精華大学にも行きましたが、あの当時は学生は1人もいなくて、キャンパスを支配している兵隊だけというような状況でした。また3週間かけたその旅行の間に犬を1匹も見ることがなかったという記憶があります。これはもちろん飢餓のために犬は全部食べてしまったということでしょうか。そういう70年代の中ごろの中国を見たということは、非常に面白い経験だったと考えています。そして、その後1980年ごろに中国も開放ということで、学生をアメリカに送るようになりました。

90年代の半ばになると、鄧小平の改革、開放をさらに推進するということで、当時の朱鎔基首相が中国の改革のために非常に努力をされました。その際に世界銀行が、中国の銀行改革問題、国有化の問題、社会保障の問題などをどうするかというようなことに関与し、その際にもまた、私は何回か中国に行く機会ができ、人民銀行とか財務省などの人たちと、恒常的に議論するような機会を持てるようになったわけです。

そこで現在の中国の問題をどういうふうに考えるかについてですが、それはこの市場経済をどのように行っていくかということになります。これまで中国では、国営企業が持っている優良な資産や若い優秀な人材を、国益企業の経営者をやっていた人たちが事実上経営者になって、子会社に全部移してスピンオフをしてしまうということを行ってきました。アメリカ的な言い方で表現すればMBO、マネージメント・バイ・アウトです。悪く言えばいわば国家資産を自分のものにしてしまうわけですね。これは石油産業や鉄鋼産業などの大規模産業以外のところで、ずっと行われてきました。残った悪い抜け殻となったような国営企業は、実は90年代の過程でかなり整理されて、今でも残っている国営企業は300ぐらいです。国家資産運営委員会というところで直接コントロールされているような国営企業というのは大変優秀企業ですから、5年間ぐらいの間に非常にプロフィタビリティーが高まってきています。

そのような状況が生まれている現在の中国経済ですが、果たして今までのような年率10％というような高度成長をこれからも続けることができるかどうかということです。中国脅威論が言われ、中国の経済成長はまだまだ10年、20年続くだろうと言われる人がいますが、私はそうは思いません。それはなぜかと申しますと、中国は経済成長が10％進んでいる過去10年間の間に、エネルギーの消費量が20％増えるような非常にエネルギー浪費的な経済だからです。そのようなエネルギーを浪費するような規模の大きな産業でそれをさらに発展させるというようなやり方は、もう持続可能ではないと考えるからです。これはもちろん中国の政治指導者たちも、分かっていることです。



そういう意味で、実は中国にとってエネルギー問題というのは最大のネックになる可能性があります。現在中国が多面的な外交を猛烈な勢いでやっていますが、それはエネルギー資源の確保が最大の使命になっているからでしょう。

その中で石油の売買をめぐって共通利益が出てくると、かつて仇敵だった産油国のロシアと安定した購買パートナーとしていい関係をもとうとする。さらに中国は、ベネズエラ、イラン、スーダンなどの、政治的には非常に権威主義的な制度を持っている国とも取引を始めていく。これはアメリカの伝統的な市場主義者には怒りを買う可能性のある問題であり、石油問題はこれから国際問題を考える上では非常に重要な問題になってくると思います。

先ほどのスタンフォードの経済政策研究所の一つのテーマとして中国問題があると言いました。ご承知のとおりアメリカが対中大幅赤字で、中国は外貨準備で日本を凌駕するような額に達しており、中国に依存しなければならないという状態が出てきています。だからアメリカのスノー財務長官は、21世紀の最大のアメリカのバイラテラルのパートナーというのは中国だなどと言っているわけです。つまり財務長官としては中国には確実に外貨準備を保持してもらい、ドルの暴落が起きては困るということなのでしょう。

結局、先ほどあげた二つめのテーマの環境とかエネルギーの問題と、一つめのアメリカのドルの問題というのが、お互いに非常に関連しあっており、これは非常に複雑な方程式になっています。

さてそうした中で、それでは日本はどうするかです。中国の普通の市民に聞くと、彼らにとって日本は脅威だと言います。それは日本は資源がないから必ずまた資源を獲得するために進出するに違いない

青木昌彦教授のプロフィール

東京大学経済学部卒、ミネソタ大学Ph.D.　その後スタンフォード大学、ハーバード大学、京都大学などで教鞭をとる。理論計量経済学会会長、通商産業研究所所長、独立行政法人経済産業研究所所長などを歴任。スタンフォード大学名誉教授、京都大学名誉教授、中国人民大学名誉教授。国際シュムペーター学会シュムペーター賞、日本学士院賞など受賞。著書多数。

と言うのです。ただ、資源をもっているということは必ずしもメリットがあるわけではありません。資源の豊富な、例えばインドネシアであるとかサウジアラビアとかナイジェリアというような国は、所得分配が非常に不平等になって、サウジアラビアなどでは若者の20代の人たちの40％が失業状態にあります。サウジアラビアが、テロリストの一つの大きな供給源になっているのは、そうしたことにある程度起因していると思います。

日本は、幸か不幸かハードとしての資源はないわけですが、そのおかげで環境にやさしい技術、エネルギー・セービングの技術というものを発達させてきました。私は日本の技術がこれからの市場の大きなアセットになるのではないかと考えています。今エネルギー価格がものすごい勢いで上がっていますが、日本は一番びくともしないような経済を作り上げてきたという面があります。一方、中国においては遅かれ早かれ、この高度成長のつけとして環境問題とかエネルギー問題が必ず大きなショックとなり、それが一つの社会的な不安定性をもたらすような時期が来るのではないかと思っています。

そういう意味で日本の環境技術は、今後とても大変に重要な資産になるわけですから、中国経済も日本のそういう技術なしには、経済を転換していくことは非常に難しいということになるわけです。

これは日本が1960年代に高度成長があって、60年代末に水俣病などいろいろな公害問題が起きたことと類似しています。「くたばれGNP」という言葉が流行語になり、また東京とか大阪とか京都とか横浜とかいう首長選挙で、社会党とか共産党の連合体の、いわゆる高度成長批判派が選挙を総なめにするという時期がありました。中国はそのような選挙制度を持っていませんから、社会的な不安定性は違った形で現れるでしょうが、同様に中国の社会の一つの大きな転換になるのではないかと思います。

さらにもう一つ申し上げたいのは、中国では別の新たな動きが起きているということです。それは法の支配です。これまで中国では地方の低いレベルの役人が、農民から土地を安く、ほとんどただ同然に取り上げていました。それに対する問題が現在非常に激化しています。これは中国の中央政府としても看過できない問題なので、農民からの土地の収用に関して、適正な価格を払わなければならないということを政策として打ち出しています。そうすると、過去にさかのぼって土地を取られた農民も、大きく騒ぎ出してくるわけです。それが暴動に発展しては困るということで、政府はそういう不満をできるだけ法律的に処理していこうとしています。

法律的な処理が注目されているのは、学生の数をみればわかります。中国で一番、学生の高度成長している学部というのが、実は法学部なんです。優秀な学生は地方から来て、精華大学とか北京大学の法学部に行って、その多くは上海などでコマーシャル・ロイヤーになるわけです。

昔から中国は契約を守らないということで、日本の企業には不平がありますが、実は中国人同士もそうなわけです。以前は何らかの社会的な手段で解決されていたのでしょうが、最近はだんだん法律的なプロセスで、契約上の論争を解決しようという方向に、現在行っているわけです。上海とか浙江省とか江蘇省とか非常に進んでいるところでは、契約上の論争などは弁護士の間の話し合いや裁判所に持っていくというような形で行うという、いわゆるルール・オブ・ローが生まれています。

そうした土壌が生まれている中で、法学部の学生がNGOを作って、先に述べたような農民の土地取引に対する不満などを、法的なプロセスに乗せて処理するという積極的な役割を果たすケースも出てきているのです。それは土地の所有権というような権利意識を、農民にも目覚めさせているということでもあります。中国はこれからルール・オブ・ローに向かっていく、一つの兆しのようなものも一方では見えているということです。そのように中国社会においても、法の支配が確立していくということは、いろんな意味でわれわれの利益にもなるわけです。そういう国際的なルールの中に彼らを巻き込んでいく中で、この地域でイニシアティブをとるなり、グローバルに役割を果たしていくということが日本にとって今後重要ではないかと思います。

ですからわれわれ日本人は、中国脅威論というようなことを誇大に考えるのではなく、冷静に中国の社会を分析していく、あるいはそれとアメリカとの関係はどうなっていくかという形で、日本の将来っていうものを考えていくべきではないかと私は思います。どうもご静聴ありがとうございました。

（文責：石澤靖治 パブリシティ委員会委員長
1988 Harvard U.）

総会報告および決算

会長の総会あいさつ

長坂 健二郎 会長
1962 Columbia U.

この度会長に選任された長坂でございます。会員総数7千人余、いずれも各界でご活躍の錚々たる方々ばかりですので、私としては大変光栄に存じますと共に、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。

さて当同窓会は通常の学校の同窓会といささか性格を異にしているように思われます。勿論、同窓会でありますので、第1の目的は会員相互の親睦と交流でありましょうが、唯今申し上げましたように、会員の方々はいずれも第一線でご活躍中でありますので、会員相互の交流がそのまま素晴らしい刺戟となり、相互啓発につながるものと存じます。

第2の目的は私達の若き日の貴重な体験を次の世代に引き継いで行くということであります。これこそは通常の同窓会にはみられない、当会独特のものであります。米国への留学が私達のその後の人生に如何に大きな影響を与えたか、また人材交流が相互理解と世界平和の為に如何に有効であるか、ということを考えるとき、次の世代の方々も同じような体験ができるようにしたい、との思いを深くします。またそれが私達の義務だと思います。

今日に至るまで日米両政府の拠出により、双方向のフルブライト奨学生プログラムは続けられてはいますが、その金額は一頃に比べかなり減額されており、対象人員は絞られています。そこで私達は会員及び企業から広く浄財を募り、政府ベースの人材交流を補強する必要があります。こうした考えに基づき、この程2008年3月を最終期限として総額2億円の募金活動を行っています。しかし大勢の方々の善意にもかかわらず、目標の満額達成は決して楽観を許しません。仮に満額集まったとしても、交換留学生の総数は政府プログラムと合わせて、精々韓国並みであり、その3倍のドイツには到底及びません。このため、企業・個人に対する募金の依頼だけでなく、チャリティ・ゴルフやコンサートを実施しています。本席を借りて、皆様のご支援ご協力をあらためてお願い申し上げる次第です。

これに加えて第3に、日本人留学生のためのオリエンテーションに対して、いささかなりともお手伝いをすること、また米国からの留学生に対し日本をより良く知ってもらうための活動をすること、なども当同窓会の目的のひとつかと存じます。特に後者については、歓迎レセプションのほか鎌倉や日光への小旅行に同行し、日本の文化や生活について理解を深めてもらうというプログラムを実施しています。これらは全てボランティア活動でありますので、お時間の割ける方は是非ご参加下さるようお願いいたします。

以上、会員の皆様に対しご依頼することばかりで恐縮でございますが、是非この同窓会を私達自身のものであると同時に、将来来られる方達のためのものでもある、とのご認識に立って、宜しくご協力下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

2006年度総会での各種報告

2006／2007年度役員（敬称略）

●会　長：長坂健二郎（昇任）
●副会長：佐藤ギン子、有馬朗人、千本倖生（新任）、竹内　洋（新任）、住田良能（新任）
● Alumni Meetings　委員長：日比谷潤子
　副委員長：福田　学
● Hospitality Committee　委員長：太田隆次
　副委員長：島田道子
　副委員長：外池滋生（新任）
● Publicity Committee　委員長：石澤靖治（新任）
　副委員長：江端貴子
● Foundation Liaison　委員長：金田　新
　監査役：原田敬美
●顧　問：渡邉　宏、行天豊雄、橋本　徹、金子尚志、開原成允（新任）、南原　晃（新任）

2005年度決算・2006年度予算比較表

（単位：千円）

	2005年度決算	2006年度予算
Ⅰ　収入の部		
会費	5,156	5,000
寄付金	9	10
受取利息	0	0
募金手数料	534	1,181
PC賃貸料	120	120
広告料収入	300	300
雑収入	0	0
当期収入計（A）	6,119	6,611
前期繰越	17,560	16,020
収入合計（B）	23,679	22,631
Ⅱ　支出の部		
旅費交通費	262	260
通信費	2,279	1,800
印刷費	890	900
什器備品	209	100
水道光熱費	167	170
修繕費	21	50
消耗品費	54	60
地代家賃	242	250
会合費	88	0
倉庫料	22	30
事務用品費	184	190
給料手当	2,986	2,600
奨学生費	22	250
支払手数料	31	30
図書購入費	16	20
会議費	179	150
雑費	11	20
予備費	0	300
当期支出合計（C）	7,663	7,180
当期収支差額（A）−（C）	-1,544	-569
50周年記念出版物代金（D）	4	0
100周年記念募金費用（E）	0	1,100
次期繰越（B）−（C）+（D）−（E）	16,020	14,351

2005年度会務報告

05.04.05（火）第2回セミナー（於JUSEC会議室）
[講師] 池井優慶応義塾大学名誉教授
[出席者] 会員28名、招待者3名、合計31名
05.05.26（木）フルブライト上院議員生誕100周年記念 2005年度総会・講演会・懇親会（於都市センターホテル）
[講演者] 猪口邦子上智大学法学部教授（現内閣府特命担当大臣）
[出席者] 会員62名、家族・友人7名、招待者17名、合計86名
05.05.31（火）米国人ニュー・グランティーのための国会および最高裁判所見学会
[参加者] 米国人ニュー・グランティーその他14名、関係者数6名、合計20名
05.06.14（火）FMF夕食ボランティア[協力者] 26名
05.06.21（火）FMF都市同行ボランティア
栃木県日光市、茨城県東海村、埼玉県さいたま市、東京都品川区に会員各1名、計4名同行
05.06.24（金）フルブライト記念財団評議員会・理事会（於JUSEC会議室）
05.07.05（火）第3回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
[講師] アニカ・カルバー早稲田大学在籍フルブライト・フェロー
[出席者] 会員14名、招待者3名、合計17名
05.09-10　ハリケーン「カトリーナ」被害見舞い募金実施
[協力者] 351名、[募金額] 286万円
10月28日（金）開原成允会長が米国大使館に寄託
05.10　05/06ホスト・ファミリー・プログラムマッチング[協力者] 13名
05.10.11（火）FMF夕食ボランティア[協力者] 22名
05.10.14（金）2005年度臨時役員会（於JUSEC会議室）
05.10.17（月）第30回日米交流チャリティ・ゴルフ大会（於戸塚カントリー倶楽部）
[出席者] 142名[募金額] 544万円
05.10.18（火）FMF都市同行ボランティア長野県佐久市に会員1名同行
05.10.20（木）J. トーマス・シーファー大使ご夫妻歓迎晩餐会（於ホテルオークラ）
[出席者] 会員82名を含む約240名
05.10.27（木）フルブライト夫人出迎え（会員2名成田出迎え）
05.10.29（土）フルブライト夫人＆米国人ニューグランティー歓迎レセプション（於ホテルニューオータニ）
[出席者] 会員92名、家族・友人8名、招待者41名、合計141名
05.11.10-12（木）-（土）U.S. Fulbright Association 28th Annual Conference（At Baltimore）に会員2名参加
05.11.22（火）FMF夕食ボランティア[協力者] 32名
05.11.23（水）第2回鎌倉ウォーキング・ツアー
[参加者] 米国人ニューグランティーとその同伴者5名、会員（日本人）30名、合計35名
05.11.29（火）FMF都市同行ボランティア東京都昭島市、台東区に会員各1名同行
05.12.20（火）NEWSLETTER Vol.18を発行
06.02.04（土）フルブライト生誕100周年記念演奏会（於津田ホール）
[演奏者] チェロ：堤剛、ピアノ：田崎悦子
[参加者] 425名
06.02.06（月）第4回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
[講師] 澤田悠紀2004年度日本人フルブライター
[出席者] 会員13名、招待者3名、合計16名
06.02.20（月）2005年度定例役員会（於JUSEC会議室）
06.03.27（月）フルブライト記念財団評議員会・理事会（於JUSEC会議室）
06.03.30（木）第5回セミナー（於山王グランドビル貸会議室）
[講師] 行天豊雄（財）国際通貨研究所理事長
[出席者] 会員29名、招待者1名、合計30名

新役員の紹介

千本 倖生　副会長

1967 U. of Florida

私がNTT、当時の電電公社入社後に、フルブライト留学生としてフロリダの地を踏んだのは25歳の時であった。そこでの留学生活は、後の人生に計り知れない影響を与えた。これまでDDI（現KDDI）やイー・アクセスをはじめ、6つほど会社を立ち上げてきたが、その根底にはアメリカで学んだ「リスクをとって新しい事業に挑戦することに最も価値がある」「独占は悪であり、公明正大な競争が消費者に最良の恵みをもたらす」という思想があった。アメリカに留学することがなければ起業などせずに、今もNTTの一サラリーマンとして働いていたかもしれない。

留学当時のこんなエピソードを覚えている。アメリカの懐の深さに感動し、現地の担当者に「どのような恩返しをすればよいか」と尋ねたら、「我々はあなたに今すぐ何も求めない。その代わり、あなたが自国に戻って日本の発展のために貢献することだ」という答えが返ってきた。いくつかの企業を立ち上げることで、微力ながら日本のIT産業と国民に役に立てたのではないかと思っている。更には、米国をはじめとする国際社会にもポジティブな影響を与えることができたと考えている。そして今感謝の気持ちを込めて、多少なりとも恩返しをしたいと思うようになった。副会長として、次の若い日本のフルブライターを一人でも多く育成し、外国のフルブライターを一人でも多く受け入れる環境をつくっていきたいと考えている。

（イー・アクセス株式会社、イーモバイル株式会社代表取締役会長兼CEO）

竹内　洋　副会長

1975 U. of California, Berkeley

東京フルブライト・アソシエイション副会長になりました竹内洋（よう）です。米国留学は1975年から1977年にかけて、カリフォルニア大学のバークレイのLaw Schoolに行きました。

たまたま日本人留学生は一人で、一方日系アメリカ人はかなりいたため、彼らと一緒に扱われ、こんなに英語が下手なアメリカ人でも一流大学のロースクールに来られるのか、とからかわれました。大蔵省から留学したこともあり、米国で学んだ租税法や証券取引法またその背後にある基本的な考え方（Common Law的なLegal mind）がその後の仕事で大いに役立ちました。更に、ハーバード大学の国際問題研究所のU.S.-Japan ProgramのVisiting scholar にもなり、market orientedな思考法が身につきました。

ここ何年かの間、財政投融資制度の改革や、郵政民営化の仕事をさせていただき、現在は日本政策投資銀行で銀行の完全民営化の作業しております。今年もHarvard Law School主催の日米の金融経済の会議に行ってまいりましたが、我が国の公的金融制度やPublic debt managementは外国の人にはなかなかわかりにくい面がありますので、お声をかけていただければ我が国のPublic Financeについての理解の向上に微力ながらお役に立てると思います。

（日本政策投資銀行理事）

住田　良能　副会長

1979 George Washington U.

長坂会長から「副会長を」という話をいただいた時は、いささかショックでした。フルブライト・プログラムへの恩返しの機会を得ることができるのはもとより光栄であり喜びなのですが、ショックというのは、とうとう自分もこのような誘いを受ける年齢に達してしまったのかという思いからです。私は1979－80年、ワシントンDCのジョージ・ワシントン大学中ソ研究所で学ばせてもらいました。この研究生活は、記者という多忙で騒々しい日常に一時お別れして、関心のあった中国、ソ連、特に中ソ関係に没頭できたという点で、人生のなかでまさに豊穣な1年でした。毎朝コーヒーをともにした研究所

長は、のちにレーガン大統領の安全保障担当補佐官になりました。所員は多士済々。週二回のコロキアムはホワイトハウスや国務省、国防総省などの現役も参加する会合で、米国型「世界戦略」形成の一端を垣間見た思いでした。当時の米国の敵役だったそのソ連は消滅し、いまさらながら時の流れを感じます。米国での経験は日本を知ることにも通じると痛感しました。懐かしい充実した日々を思い起こすにつけ、フルブライト・プログラムがこれからも一人でも多くの人に意義ある経験の機会を提供できるよう、微力ながらお手伝いしたいと思っております。よろしくお願いします。　（産経新聞社社長）

外池滋生　ホスピタリティ委員会副委員長

1990 M.I.T.

この度ホスピタリティー・コミティーに新しく加わりました外池滋生（とのいけ・しげお）でございます。現在青山学院大学文学部英米文学科で教鞭をとっております。

2年前に鎌倉ウォーキングツアーに初めて参加しまして、参加者が誰について行ってよいのか分からない様子だったので、その辺にあった枯れ草の幹に配布された印刷物をつけて、ガイドさんの旗のようなものを作って、先導していたのが、TFAの正野事務局長、ホスピタリティー・コミティーの太田委員長、島田副委員長の目にとまったか、しばらくして学校に正野事務局長から、ホスピタリティ・コミティーに入らないかとお誘いのお電話を頂きました。そろそろ留学時代に受けたhospitalityをお返しする意味でも、何かのお役に立てればいいなと考えておりましたこともあり、お引き受けすることにした次第です。

私は年齢は59歳ですが、Fulbrighterとして比較的新しく、1990年8月から1992年4月まで、前任校の明治学院大学に在職中に、上級研究員（senior researcher）としてMITに参りました。この間私の教え子が一人MITに、もう一人Harvardに留学中であり、また、何人かの古くからの研究仲間とも再会することとなり、また全く違った分野の人たちとも交流が生まれ、大変充実した研究期間を過ごすことができました。

私は実は1973年の幻のFulbrighterで、このときにはtravel grantをもらえることになったのですが、まだ職のない大学院生でしたので、最大4年間Ph.Dを取るまで奨学金を出してくれるという魅力に勝てずEast West Centerの奨 学金を選びました。今回このお仕事をお引き受けしたのは、ハワイ時代に受けたhospitalityに対する恩返しも含めているつもりでございます。

いろいろと不慣れなことがあるかとは思いますがよろしくお願いいたします。　（青山学院大学教授）

石澤靖治　パブリシティ委員会委員長

1988 Harvard U.

本来なら人と違ったことを言ったり書いたりするのを生業にしてきた私ですが、ここに書くことは、これまでの方とたぶん同じになってしまいます。「自分の人生にとって極めて大きな存在であり、感謝の念にたえないフルブライト・プログラム。その同窓会の仕事を依頼されては引き受けないわけにはいかない」――そんな気持ちでこの任務をお引き受けすることになりました。同窓会の活動それ自体が順調に進行することが最重要なのはもちろんですが、そうした活動をよりわかりやすい形で発信していくことで、活動自体も活性化していくのではないかと思います。微力ですが、副委員長の江端さんとともに尽力したいと思います。また改善のためのご指摘などありましたら、いつでもお待ちしております。　（学習院女子大学教授）

沖縄同窓会の新たな試み

比嘉幹郎　ガリオア・フルブライト沖縄同窓会
沖縄・アメリカ協会会長
1954 U. of California, Berkeley

沖縄から米国へガリオア留学生が初めて送られたのは1949年であった。その年は僅か2人だったが、翌年には53人に増え、その後、ガリオア資金または沖縄統治者の米国陸軍省が支出した別名類似の資金で、毎年、少ない年で20人、多い年で84人、日本復帰直前の70年度までの21年間に1,000人余の留学生が米国各地の大学に配置され、勉強する機会が与えられた。

いわゆる“米留”は、毎年、米国か沖縄でグループでオリエンテーションを受けた後、原則的に就学期間は1学年と限定されていたが、なかには政府奨学金以外の学費を自己努力で獲得し、大学を卒業した人や大学院の修士・博士課程を修了した人も少なくない。

したがって、米施政権者は、その意図はどうであれ、戦後沖縄の人材育成に関する限り、大いに貢献したといえよう。

米留経験者が帰国し始めて間もない52年に「金門クラブ」と呼ばれる同窓会が誕生した。米軍輸送船で大勢の米兵と寝食を共にし、2、3週間もかけて太平洋を横断し、疲れ切ったところで、初めてサンフランシスコのゴールデン・ゲイト・ブリッジを見た時の感動を表明してクラブ名がつけられた。

その後、クラブ会員もしだいに増加し、その活動も親睦会や講演会などで活発になり、50年代半ばには米軍払い下げの資材援助や民間企業からの寄付金で那覇市内にクラブの拠点として「金門会館」を建設し、61年5月には「人材の育成及び文化の向上」を目的とした財団法人琉球財団を設立した。

しかし、米国統治者は沖縄の日本復帰が目前に迫ると米留制度を止めてしまった。そのころから金門クラブ活動が低迷し、約10年間、殆ど有名無実的存在になっていたと思われる。その頃日本本土では、米留経験者の同窓会組織づくりが東京を中心に進められていった。沖縄もその動きに呼応して、金門クラブを発展的に解消し、全国9ブロックの1独立組織としてガリオア・フルブライト沖縄同窓会を設立した。

しかし、この沖縄同窓会は実質的にガリオア留学生で組織され、1972年まで米国統治下に置かれていた沖縄にはフルブライト奨学金制度の適用は全くなく、復帰後も沖縄県からはごく少数の留学生や研修生あるいは交換教授がその恩恵を受けただけで、同窓会員も年を取り、その活動もむつかしくなりつつある。

このような沖縄独特の状況下で、米国側との交流を促進し相互の理解を深めるための後継者育成の重要性を痛感し、2000年7月のG8サミット会議が沖縄で開催される直前の7月4日に沖縄・アメリカ協会を設立した。留学だけでなく、米国と何らかのつながりのある者または同会の目的に賛同する者は誰でも加入できる組織にした。クリントン大統領の来沖を歓迎し、同大統領に直に復帰前の米留制度についてお礼を申し上げることができた。

現在、同窓会と協会の両組織は一体化を進め、年次総会や新年会、外来客の歓迎会など、諸活動を合同で行っている。沖縄の長い歴史をひもどくと、例えば19世紀半ばに米国のペリー提督が沖縄を根拠地として日本の開国を実現したことや20世紀半ばには沖縄を米軍基地として占領し日本の非軍事化・民主化政策を実施したこと、そして現在でも日米安保体制の要になっていることなどが明らかであり。その意味では日本の国際化は沖縄から始まると言ってよいのかも知れない。今後、沖縄・アメリカ協会が多くの会員を結集し、米国との交流・親善を図り、沖縄独自の発展と日本の国際化に寄与することを期待したい。

Fulbright Centennial Concert

Marigold S. Holmes
Manager for Public Relations
JUSEC

On a beautiful Saturday afternoon in February, over 425 people gathered at Tsuda Hall in Sendagaya, Tokyo to celebrate Senator Fulbright's Centennial Year through music. Two world renowned Fulbright musicians, Pianist Etsuko Tazaki and Cellist Tsuyoshi Tsutsumi performed in commemoration of this very special occasion. As the lights were dimmed and the first notes rang throughout the hall, we all knew what a special treat this would be, and for the next two hours, the audience remained captivated by the beautiful music performed by the two talented Fulbright alumni.

This special concert held on February 4th was organized by the Japan-United States Educational Commission (JUSEC), the Japan GARIOA/ Fulbright Alumni Associations and the Japan-U.S. Educational Exchange Promotion Foundation (Fulbright Foundation). Fulbright Alumnus Mr. Shinji Yamada (1992, Fulbright Journalist), who coordinated a similar concert in 2002 on the occasion of the Japan-U.S. Fulbright Program's 50th Anniversary, once again orchestrated this successful event. Unlike the 50th Anniversary Concert however, ticket sales were managed "in-house" by the organizers, and an on-line ticket sales and booking management system was developed by JUSEC's Systems Specialist. By November 1, 2005 preparations were completed and ticket sales began. From the initial reservations to assigning seats, confirming payment and sending the tickets, the JUSEC Secretariat turned into a "ticket pia" type operation with various staff involved each step of the way. Despite minor glitches, the operations ran very smoothly. Tickets were sold for 4,000 yen (reserved seats) and 3,000 yen (non reserved seats). The concert was very popular, with tickets in high demand, and by mid-January, 2006 tickets available to the general public had been sold out. Of the 490 seats available, all but one seat had been spoken for by the start of the concert.

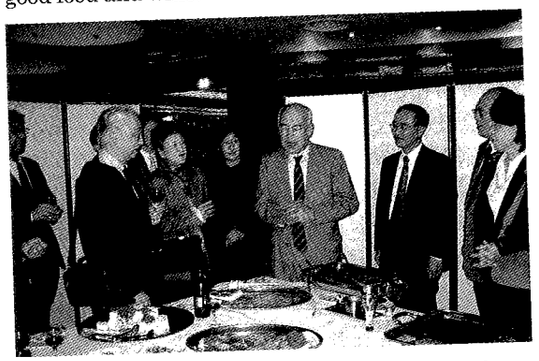
As ticket sales were well underway, Mr. Yamada and the performers were busy planning the program. With the hopes that the audience might experience international exchange through music, Ms. Tazaki and Mr. Tsutsumi suggested incorporating modern works representative of Japan and the U.S. among numbers fundamental to German classical music. With this in mind, the following scores were selected: Lucas Foss--*Capriccio for cello and pinao, Toru Takemitsu--Orion, Beethoven--Piano Sonata No. 31 in A flat major, Op. 110, Bach--Cello Suite No. 2 in D Minor, BWV1008, and Brahms*--Cello Sonata No.2, in F major, Op. 99.

The audience roared with applause as the last note was played. The magical afternoon was nearing an end, but not before the performers answered to the crowd's standing ovation with Debussy's Reverie. The concert would remain a vivid memory for all of us who had the fortune to share the afternoon together, and we all left the hall feeling honored to have been a part of this extraordinary gathering.

After what seemed like a very short two hours, Ms. Tazaki and Mr. Tsutsumi were greeted back-stage by beautiful flower bouquets and

excited fans waiting to express their appreciation for the stunning performance. Though one can only imagine the energy that went into performing such breathtaking music, the performers pleasantly greeted their fans without a sign of being tired.

As the hall buzzed with excitement over the success of this concert, key supporters and guests gathered at Jucchiem Restaurant in Tsuda Hall to honor the musicians and those who made the concert possible. Though the venue was rather small, everyone seemed to enjoy an intimate evening, recounting the amazing concert and getting to know one another, while enjoying the good food and wine.



Of course, such a concert would not have been possible without the understanding and assistance of numerous individuals and organizations. The energy and countless hours put into organizing this concert by Mr. Yamada were above and beyond, and we cannot thank him enough for his leadership and contributions. We would also like to extend our most sincere appreciation to the performers, Ms. Tazaki and Mr. Tsutsumi, who shared, so generously, their time and talent and contributed most graciously to the success of this concert. We are also very fortunate to have strong community support including the Tsuda Institute which provided the use of their hall at a very reasonable rate, United Airlines which donated two roundtrip business class tickets between Bloomington, Indiana and Tokyo for Mr. Tsutsumi and his cello, and the International University of Health and Welfare which purchased advertising space in the concert program. Without such generousity, the concert would not have been possible

Looking back at the concert a year later, I can still hear the incredible sounds that filled the hall that day. I am sure that had Senator Fulbright been there with us, he too would have enjoyed the gathering and acknowledged the power of music in bringing the world closer together. There are many ways to promote mutual understanding, and music, over the years, has definitely contributed to this effort. I hope that with the continued support of our alumni, we will be able to provide such opportunities again in the near future.

第31回日米交流チャリティ・ゴルフ大会

南原　晃 実行委員
1961 Yale U.

北朝鮮の脅威が現実のものとなり、日米関係の重要性はいや増すばかりだ。こうした中、単に募金活動というだけでなく、フルブライト留学と直接関係のない、日米財界人・団体役員、また、個人有志にも参加していただいて、世界平和を願って教育交流計画を発案されたフルブライト上院議員の遺志を理解してもらえる標記大会は、今や、わが同窓会活動の一大イベントと言ってよいだろう。

さて、今年の大会も、戸塚CCで、定例の10月の第3月曜日の16日に、165名の参加を得て、盛大に開催されたが、今回、特筆すべきことを、順序不同でいくつか挙げて、心より感謝申し上げたい。①実行委員長には、日本側は、東芝特別顧問の森本泰生さん、米国側はアフラック日本代表のチャールズ・レイクさんにお願いし快く引き受けていただいたが、森本さんは久しぶりのフルブライター委員長であり、また、レイクさんは、在日米国商工会議所会頭で、米国側委員長の定番復活である。会頭退任後も、委員長を続けていただいて今やこの大会の顔となられた、ホワイト・アンド・ケース法律事務所のロバート・グロンディンさんは、勿論、今年もお元気に参加され、アフラックと共に同法律事務所は、引き続きゴールド・スペシャル・スポンサーになって下さった。②実行委員会はそろそろ高齢化を心配しなくてはと思っていたが、今年から、第4代同窓会長故川村茂邦さんのご次男である、日誠不動産常務の川村竜司さん他2名の若手に入っていただいた。川村さんは、委員会での若々しい活動にとどまらず、スペシャル・スポンサーになっていただくなどなど、今回の大会をいろいろ支援してくださった。③今年も、第二代同窓会長故小山八郎さんと共にこの大会を発案されたロバート・ベイカーさんが、例年通り米国から駆けつけてくださったほか、、毎年5千ドルのご寄付を送っていただいていたレイモンド・ファーレイさんが、ご寄付に加えご自身来日された。そして、日米教育委員会元事務局長のキャロライン・ヤンさん、小山八郎さんのご子息、米国三井物産副社長小山修さん、更には、カナダから徳永勉さん、計5名の方々が海の向こうから来ていただいた。④昨年とは打って変わって、当日は文字通りの秋晴れ、しかし、グリーンの仕上がりは日本オープン並みの素晴らしい速さで、一昨年この欄で強調したアベレージ・ゴルファーの心得、「一に天気、二に仲間、三、四がなくて、五にスコア」を、地で行く方が圧倒的多数となった。

表彰は、内閣総理大臣杯が、リーマン・ブラザース証券の前田俊一さんへ、駐日米国大使杯が、トレーナーズラボ・ヒラマの平間日出朗さんへと手渡された。そして、19番ホールのハイライト、ホンダ・シビックの新型ハイブリッド車のオークションは、カーギル・インベストメンツの小泉洋二朗さんにより落札された。ご協力いただいた本田技研工業株式会社に深く感謝申し上げたい。結果、今年の大会の剰余金は約700万円と昨年の550万円を大きく上回り、この目録は、今年、開原成允さんより会長職を引き継がれた長坂健二郎さんから、日米教育交流振興財団理事長の賀来景英さんに贈呈された。終わりに、ご自身ゴルフをされないのに、早朝からお見えになり、参加者への挨拶だけでなく、事務も手伝っていただいた長坂新会長に深謝するとともに、大会を支えてくださったスタッフの皆様、また、戸塚CCに心より感謝したい。来年も10月の第3月曜日に開催しますので、一人でも多くのご参加とご協力をお願いしてペンを置きます。

ホスピタリティ委員会活動

アメリカンニューグランティー歓迎会

太田隆次　ホスピタリティ委員会委員長
1967 U. of Wisconsin

2006年度のアメリカンニューグランティーの歓迎会は、2006年11月10日午後6時から午後8時まで、外池滋生ホスピタリティ委員会副委員長の司会で、グランドアーク半蔵門で開かれました。ニューグランティーと家族、外務省、奨学金や航空券を寄付して頂いているスポンサー企業や団体、その他ご協力頂いている企業や個人、日米教育委員会、東京フルブライトアソシエーション会員と家族など（　）人が集まり盛会でした。まず長坂健二郎東京フルブライトアソシエーション会長から、アメリカンニューグランティーに、歓迎の言葉と実りある留学生活を送るよう激励のエールがありました。

ついで谷口智彦外務省大臣官房参事官が歓迎のご挨拶の後、乾杯の音頭をとられました。

懇談が暫く続いた後、岩田瑞穂日米教育委員会交流部プログラムマネージャーの司会で恒例により、本年度のニューグランティーから自己紹介と留学の目的や専門分野を時々ユーモアを交えて話して頂きました。自己紹介が終わった後、家族も入れて壇上に並んで全員の記念撮影をしました。

暫しの歓談の後、外池副委員長からご来賓のお名前と所属を紹介し、お名前をお呼びして挙手して頂きました。

宴たけなわになって、昨年好評だったアダム・タッカーさんに勤務先の西宮協立脳神経外科病院から来て頂き、尺八の演奏をお願いしました。タッカーさんのことは昨年のNEWSLETTERでも紹介しましたが、シアトル出身、1987～1989年の九州大学へのアメリカンフルブライターでアメリカの医師免許と日本の医師免許を持ち、西宮で脳神経外科医として活躍中です。日米両方の医師免許を持っているアメリカ人は数名しかいないそうです。もう一つの顔は琴古流尺八の演奏家で大師範、虚無僧本則の位を授かっています。CDも出しています。このCDはタッカーさんの尺八演奏が始まる少し前から、バックグラウンドミュージックで会場に流していましたので気が付かれた方がいたかも知れません。

今年はもっと分かりやすいようにと、タッカーさんのご希望でパソコンとプロジェクターで映し出されたスクリーンの画面を、白い着物姿のタッカーさん自身が説明しながら尺八を演奏されました。

おなじみのThe Star Spangled Banner, 春の海、五木の子守唄、Amazing Graceなど誰にも親しまれている曲が尺八で次から次へと演奏され、会場がその都度盛り上がりました。

タッカーさんは、参加者用に演奏曲目と自己紹介のコピーを用意されてきましたが、その中で、「尺八は言葉を用いないコミュニケーションの道具で、人の心に調和をもたらします。心の内に平安を満たします。東洋医学にも興味があります。禅の精神は近代医学にも役立ちます」「私たちは、一つの世界に属するもの同士として、もっとお互いの生き方、考え方を相互に築いていくことを学んでいかなければなりません」とおっしゃっています。これこそフルブライト精神であり、私たち日本人も改めて心すべきことではないでしょうか。

最後に、日本文化の一つとして、私が日本式の閉会には一本締めと三本締めがあることを紹介して、全員のご唱和と共に一本締めで閉会を宣しました。

なお、この日の歓迎会の前に同じ会場のレストランのラウンジで、1956年、1966年、1976年、1986年、1996年の合同同期会が開かれました。日米教育委員会の伊藤智章にモダレーターの役をお願いし、参加者一同、留学時代にタイムスリップして若き日の思い出や仲間たちの消息を語り合い、楽しいひと時を過ごされました。

国会訪問

島田道子　ホスピタリティ委員会副委員長
1957 U. of Minnesota

4月26日、日米教育委員会（以下、JUSEC）に9時40分に集合し、第二議員会館へ向かう。8名のフルブライターの内当日2名が欠席し、6名と正野氏、事務の高橋さん、遅れてJUSEC事務局長のサターホワイト氏が参加し、総勢10名だった。秘書の毛利智美さんに導かれて2階の会議室に行き、10時45分から津島議員との会見が始まった。

最初にフルブライターが簡単な自己紹介をした後、津島議員が日本の国会は英国式の議会制度を採用しており、衆議院・参議院があり、衆議院の3つの特徴として首相選出、国家予算の制定、法律（外交を含む）の承認をあげられ、選挙や議員の期間などの要点を簡潔に説明された。最後に、アジアと一口に言うが個々の国の形態は非常に異なり、いわゆる民主国家と言えるのは、日本とインドだけではないか、とおっしゃり、中国には一般国民による選挙がないと言及された。

その後、質疑応答に移り、中国と日本は政治体系が異なると言われるが、自由民主党の政権が長く続いているので、一党独裁という点では同じではないかという質問が出た。それに対し、結果的には自由民主党が長く続いているが、50年近く続いた社会党との争いも、60％以上の国民が自由な企業経営、自由経済を好み、その哲学的相違により、自由民主党を選んだ結果であると、また選挙の弊害を阻止するために小選挙区制度を導入したと答えられ、自由民主党に対立する党は、現在寄り合い所帯みたいで、一つの意見になかなかまとまらなかった点を指摘され、小沢一郎氏が党首となった民主党とは、次の選挙で重大な転換が行われるかもしれないと言われた。

次の自民党の党首には誰がなるのかという質問には、「私はそのような質問に答えるほど初心ではないョ」とおっしゃり、大笑いになった。その後、少子・高齢化問題による労働力不足のため、移民を受け入れるのかという質問に対して、フランスなどで起こっている移民問題などを例にあげられ、安易に行うべきものでなく、慎重な考慮が必要だと答えられた。

約1時間の会見はアッという間に終わり、記念撮影をした後、国会へ移動し、衆議院本会議場、天皇の控室、首相控室、正面玄関で記念写真を撮った。

米国人グランティー等の最高裁判所見学

高澤廣茂　日米教育交流振興財団監事
1966 U. of Utah

アメリカン･グランティー等最高裁判所見学は平成18年4月26日（水）午後に行われました。例年は、5月中に行はれたが、いつも表敬訪問する濱田邦夫裁判官が御定年で5月中に御退官されるので、特別の御取計らいで4月26日に行われたのです。

参加者は米国人グランティー、日米教育委員会事務局長、フルブライト・アソシエーション正野事務局長等20名位で、同裁判官による質疑応答は、本年は特に長時間にわたり詳しく感銘深いものでした。大法廷、特別図書館見学等も担当事務官により英語で行われました。

グランティーの皆様にとってよき思い出となることを願ってやみません。

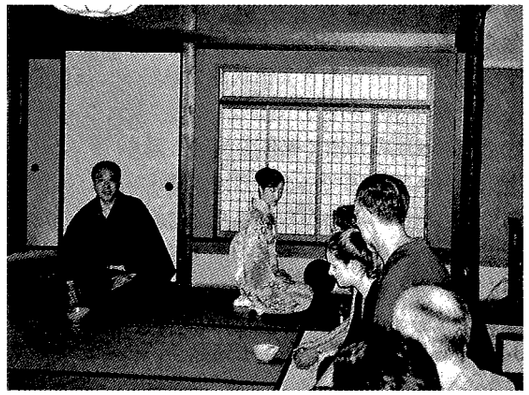
日光・宇都宮旅行（6月18日～20日）

島田道子　ホスピタリティ委員会副委員長
1957 U. of Minnesota

今回は、初めて日米教育委員会（以下、JUSEC）の国際交流プログラム（以下、IEA）と共同主催にした。昨年は参加者3人と人数的にも少なく、またJUSECからの申し出もあり、その方が「いっくら」の方々に2度お願いするよりもよいのではないかと思ったからである。

IEAから6名、フルブライト同窓会から家族を入れて3名の合計9名に加え、JUSECから岩田瑞穂さんも同行して下さった。

6月18日、宇都宮駅で大阪から来るクリスティン・ホワイトさん一家と合流し、バスで昼食のためイタリアン・レストランへ行く。日曜日でお休みのレストランが多く、また多人員のため「いっくら」の方で前もって貸切交渉をして下さり、無事昼食を済ませることが出来た。



その後、再びバスでお茶の裏千家　斎藤宗琢先生のお宅へ伺う。先生の2人のお嬢さんも着物を着て出迎えて下さった。先生がお茶の心、四季の文化、簡素の中にある美などを説明して下さった事を、私のつたない通訳にも拘らず、フルブライターは十分に理解してくれ、ホワイトさんとIEAのジョンソンさんが希望して先生に指導を受けながらお手前をやった。その後、斎藤夫人の日本舞踊や、10月に結婚なさるお嬢さんの結婚衣裳などを見せていただき、みんな大変喜んでいた。

5時にコンセーレに行き、ホスト・ファミリーに対面し、それぞれの家へ別れて行った。毎日新聞の朝刊に茶道教室の記事が写真入で掲載され、一行は大喜びした。

19日は、9時にコンセーレからバスで日光市へ行き、まず大正天皇のご静養のために造営され、戦争中は一年ほど現天皇もお住みになった田母沢御用邸記念公園を訪れた。この御用邸の中核となった建物は、紀州徳川家江戸中屋敷が献上されたもので、その後追加され、明治期に造営された御用邸でも最大規模の木造建築で、大変広く、案内通路の指示をはずれると迷子になりそうだった。お庭も広く美しく、樹齢400年という枝垂桜も毎年満開になるそうだ。

昼食は日光市内のお好み焼き屋を貸切、4つの鉄板で腕をふるう人、食べる人、ビールを飲む人と皆大いに盛り上がった。私も初めてお好み焼きというのを食べたが、とても美味しかった。

午後は東照宮を見学し、宇都宮大学の学生も応援に来てくれ、ガイド役を引き受けてくれた。

IEAのメンバーは午後5時7分の宇都宮駅を出る新幹線に乗り、東京へ一旦帰り、関西へ向かうので、3時過ぎには日光を出発した。

20日は、長門さんの案内で一行7名は足利に向かった。足利市国際交流協会事務局長の田代氏が栗田美術館で待ってて下さり、ボランティア通訳の牧野さんの案内で、江戸期に肥前鍋島藩で生産された素晴らしい伊万里の焼き物を見学した。その後、日本最古の学校で、フランシスコ・ザビエルにより「日本国中最も大にして最も有名な坂東の大学」として世界に紹介された足利学校を訪れた。学校の門前で記念撮影をする。

IEAのメンバーの一人がパスポートを入れた上着を行きの新幹線の中に忘れたり、サングラスを置き忘れたなどの小事件はあったが、紛失物は全てめでたく手許に戻り、フルブライター達は「とっても楽しかった」と最後に強い握手をしてくれたので、私も疲れが吹っ飛び、ホッとして楽しくなった。

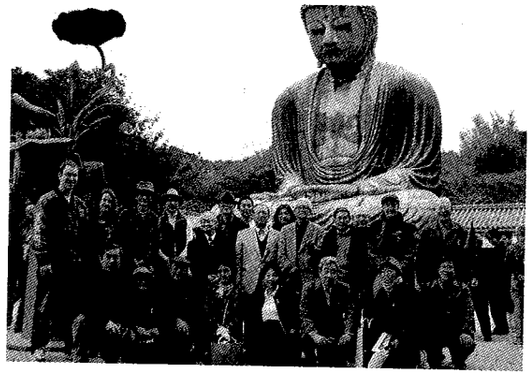
第3回鎌倉ウォーキング・ツアー

外池滋生　ホスピタリティ副委員長
1990 M.I.T.

恒例の鎌倉ウォーキング・ツアーは今年も勤労感謝の日に行った。前日までの天気予報は雨であったが、幸い、はずれて11月23日午後1時に藤沢の駅に集合したときは、曇り空に時々日がかすかにさす空模様で、やや肌寒かったが、鎌倉を散策するにはちょうどよい具合であった。集合場所で一年ぶりの再会を喜ぶ常連メンバーの姿が印象的であった。

田部滋さんが立てて下さった計画に従って、まず

は藤沢から江ノ電にゴトゴト揺られて、家並みをぬい、相模湾の景色を楽しみながら、長谷駅で下車（ここで先発組と合流）。高徳院の大仏にお参りした。



胎内巡り、記念撮影の後、徒歩で15分ほどの次の目的地、鎌倉文学館に向かう。加賀百万石の旧藩主前田侯爵家が鎌倉別邸を鎌倉市に寄贈して文学館として文学者の直筆原稿などを展示しているもので、建物は明治時代の木造西洋館で、建築物としても一見の価値あるものであった。この企画で訪れるのが初めてであったこともあり、みんなそれぞれに熱心に展示を見ていたため、雲に遮られた日も大分傾いてきた。そのため、急遽、鶴岡八幡宮は希望者だけが行くことになって（宮原さんが引率）、残りの一行は北条政子が創建し、政子の墓も残っていると伝えられる寿福寺に向かうことに。（庭で記念撮影）

途中吉屋信子記念館の前を通りがかったところ思いがけなく（田部さんの説明によると年数日しか開けないということであった）開いていたので、庭だけ拝見することにした。屋敷の中では人が集まって何かの説明に聞き入っていた。

その後は鎌倉の市街の背後の森の裾を縫うように落ち着いた住宅地のなかの曲がりくねった通りを楽しみながら、市役所前の通りまで出て、そのまま北に進すみ、寿福寺についたころには日もかなり傾いていた。このお寺のお堂は一般には公開していなくて、濱田利郎さん（'69 Columbia U.）の幼なじみの金子健二さんのご紹介で特別見せていただくこととなったもの。金子健二さんが我々の来るのが遅いので心配して道まで迎えに来てくださった。落ち着いた佇まいのお寺で、鹿威しの音が柔らかく庭に鳴り響き、庭には市の天然記念物に指定されている四株の柏槇（ビャクシン）の大木があった。お堂の前で記念撮影をした後、5時の「和民」の約束には少し早いと言うことで、まずは裏山の実朝と政子の墓に向かう。裏山の礫岩か砂岩の崖を穿った中にお墓はあったが、祠の中は暗くてカメラのフラッシュを焚かなければ中が見えないほどであった。このあたりで雨が少し降り出してきたので、急ぎ足で和民に向かう。

先に着いた人と最後に着いた人との間では大分時間に差があったようだが、緑の旗を持って前後に忙しく動きながらはぐれる人がないように世話をしてくださった正野さんと太田さんのお陰で、ほぼ5時ころ全員無事「和民」で再会。西村史郎さん（'52 U. of Iowa）の音頭で乾杯の後は、鍋を囲んでの談笑。お酒もすすんで各テーブルで話に花が咲いた。最後に太田隆次さんから締めくくりの挨拶をいただいて、恒例の鎌倉ウォーキングツアーもお開きとなった。

今回の参加者はグランティー6名（うち二人は仙台からバスで駆けつける）とTFA会員23名、計29名であった。

ホストファミリー

2006年度も多数の希望者があり、以下の表の通り行われることになりました。

No.	氏名	Gender	Name	Home	Host Affiliation	Department
1	原田　敬美	Mr.	BROWNELL, Blaine E.	Rice U.	Tokyo U. of Science	Urban & Regional Planning
2	外池　滋生	Ms.	CAMP, Margaret	U. of Arizona	Keio U.	Linguistics
3	堀江　昭	Ms.	ESSOYAN, Susan E.	Honolulu Star-Bulletin	APOF	Architecture
4	江端　貴子	Mr.	PRATT, Richard C.	U. of Hawaii at Manoa	Sophia U.	Public Administration
5	賀来　景英	Mr.	SMITKA, Michael J.	Washington and Lee U.	Chiba U.	Economic Theory
6	宮崎　基則	Ms.	TARCOV, Marianne S.	U. of Chicago	Kanto Gakuin U.	Japanese Literature
7	成田　和信	Mr.	VAN COMPERNOLLE, Timothy J.	Coll. of William and Mary	Keio U.	Japanese Literature

日本フルブライト・メモリアル基金（J-FMF）への協力ボランティア活動

日本フルブライトメモリアル基金10周年を迎えて

JFMFプログラムディレクター
ジョーンズ　享子

2006年11月16日、日本フルブライトメモリアル基金の10周年記念歓迎会が新宿の京王プラザホテルで開催された。

記念歓迎会では、サターホワイト事務局長に続き、遠藤利明文部科学副大臣からそしてアメリカ大使館からはジョン・モラーン文化アタッシェからのご挨拶を頂いた。お二人とも着任されて間もない。乾杯の音頭をとってくださった橋本徹氏はフルブライト留学当時の思い出を語った。

11月16日の午前中にはJFMFの10周年記念行事として日米の教育長を数人お招きして21世紀の教育がどうあるべきかについてパネルデイスカッションを行った。州／県レベル、中都市、都市圏から離れた地域という3地域から来て頂いた。中教審の木村孟先生をモデレーターに、アメリカ側はウイスコンシン州、ミシガン州ノースビル市、テキサス州カリスバーグ市、日本側は千葉県、石川県小松市、宮城県気仙沼市の教育長あるいは代理の副教育長が出席された。もともと地方分権であるアメリカの教育と地方分権が現在推進されている日本の教育と事情は全く違っているが、「グローバルな視点を育成すべくまず自分の地域社会を知り実践は足下から」など、活発な意見交換が行われた。その後、アメリカ側の教育長の方々にはそれぞれのレベルごとに千葉県、小松市、気仙沼市を訪問させていただいた。これを期に、今後も交流されることが望まれる。

JFMFの初年度よりフルブライト同窓生のご協力をいただいているボランテイア・デイナーも10年経った今ではすっかり定着し、Teacher Programにはなくてはならないプログラムの一部となった。改めてフルブライターに深く感謝申し上げる。

J-FMF教員プログラムに寄せて

安河内景山
1956 Manhattan C.

日本フルブライト・メモリアル基金（J-FMF）教員プログラムは、「フルブライト交流計画」の50周年を記念して、アメリカの初等、中等教員および教育関係者に、日本の教育制度と文化を体験してもらえるよう、1997年に日本政府により設立され、今年で10年目を迎えましたが、この11月までに6千名近い教育者の来日が実現しております。本招聘事業は年3回で600名が来日され、東京での研修の後、20名単位のグループに分かれ、全国各地の10都市に1週間あまり出向いています。

東京同窓会のリソースパーソンの一人として、到着日の夕食ボランティアには欠かさず参加し、また関東地区地方都市の市長、教育長への表敬訪問にも同道の機会を得ています。アメリカの小学校教師の大多数が女性であるために、来日する教育者の8割近くは女性であり、夕食ボランティアの席が紅一点ならぬ逆の立場になること再三で、私まで楽しい一夜のお相伴にあずかっています。

地方都市での訪問先は小中高、大学（教育学部）、そして週末のホームステイですが、小中校では授業参観、教員との懇談、清掃見学、諸活動への参加、休職の試食などが基本となっています。学校側としては受身の受入ではなく、国際理解や交流教育、ふれ合い・文化学習など積極的にアメリカからも学ぶ機会と捉えておられるので、日米間のより深い相互理解、親善に寄与していると思います。

2006年の夕食案内にご協力いただいた会員数と、市長表敬訪問に同行された方々（敬称略）は次の通りです。

6月　夕食案内：25名
　都市同行：佐々木　肇（青森県むつ市）
　　吉田　孝（福島県会津若松市）
　　石崎　貞明（石川県小松市）
10月　夕食案内：20名
　都市同行：星野　靖雄（茨城県つくば市）
　　太田　隆次（埼玉県草加市）
　　堀江　昭（神奈川県茅ヶ崎市）
　　鈴木　誠道（山梨県南アルプス市）
11月　夕食案内：37名
　都市同行：太田　敬雄（群馬県桐生市）
　　田中　武雄（千葉県印西市）

セミナー（勉強会）の報告

フルブライト・セミナー開催

石澤靖治　パブリシティ委員会委員長
1988 Harvard U.

以前のフルブライターとしての成果や、またその経験を生かして各分野で活躍するフルブライターの方々の話を聞きたいということから、昨年復活したフルブライト・セミナーですが、今年は4回開催することができました。

初回は本同窓会の前会長でもあられた元大蔵省財務官、東京銀行会長などを歴任され、現在は国際通貨研究所理事長の行天豊雄氏、2回目は毎日新聞論説委員の青野由利氏、3回目は警察大学校警察政策研究センター主任教授の樋口晴彦氏、そして4回目は都立小石川中等教育学校教諭の望月尚子氏というように、年代から分野まで様々な方面にわたるフルブライターから貴重なお話を聞く機会を得ることができました。その内容については個別の欄で紹介していますが、こうした同窓生同士の勉強会は仲間同士の親近感から、公式の場では聞けないようなストレートな内容の話を伺うことができるものです。本セミナーもそうした例にもれず非常に得がたい機会でした。お忙しい中、時間を割いて下さったスピーカーの方々には心より御礼申し上げます。またゲストスピーカーの方々がそのようなスタンスで話をしてくださったことで、参加者からも同様に率直な質問が投げかけられて、内容の濃い時間になったと思います。

参加費は飲み物と軽食の実費1000円で、事務局のある山王グランドビルの別の部屋で午後6時から8時ごろまで行っております。次年度もまた、年数回のホットで知的な空間が生まれることがこれからも楽しみです。みなさん、ふるってご参加ください。またゲストスピーカーはこれまでこちらで選ばせていただいていましたが、そちらも募集中です。事務局までお問い合わせください。

第5回セミナー　06年3月30日

ポスト・グリーンスパンFRB議長の金融政策

行天豊雄　国際通貨研究所理事長
1956 Princeton U.

今年1月末、米国連邦準備理事会（FRB）アラン・グリーンスパン議長は18年の長きにわたった任を終え、予想通りバーナンキ新議長が誕生した。FRBの役割は高い中立性と、完全雇用達成および価格安定にあり、その政策金利決定は世界中の金融市場が注目する。

グリーンスパン前議長は昨年12月にお会いした時、87年8月のブラック・マンデーは今でも5分刻みで覚えていると話されたが、世界経済の順調な発展に貢献し、「マエストロ」と呼ばれ、高く評価されてきた。天才的な読みの深さで、市場、議会、労働組合との対話に巧みで、大変な勉強家でもあった。

対照的に不人気ながら、インフレ抑制に大きな功績のあった前任者ポール・ボルカー元議長は、「公僕」と呼ぶに相応しい人物であったが、内部造反に会い自ら職を去った。

バーナンキ新議長は、賢明で順調なスタートを切っている。日本のメディア、学者は往々にして米国経済を悲観的に見勝ちであるが、経常収支の赤字は国外からの資本流入で賄われ、現実にはsustainableである。

第6回　5月12日

生命科学と倫理
ー日米欧の対応はどう違うか

青野由利　毎日新聞論説委員、科学環境部編集委員
1988 M.I.T.

これまでフルブライターとしてのMIT留学に加えて、イギリスでの研究経験をもつなど日本有数の科学ジャーナリストである青野さんが、生命科学と倫理の問題を語ってくれた。現在最もホットである一方、難しいこの問題を日米欧のそれぞれの視点から鋭く分析。その後の質疑ではこの問題についてのメディアの報道のあり方や終末医療のあり方を中心に活発な議論が展開された。

第7回　9月1日

組織行動の「まずい!!」学

樋口晴彦　警察大学校
警察政策研修センター　主任教授
1995 Dartmouth C.

平成14年に起きた三菱重工客船火災事故を例に、失敗をもたらした直接的な原因の多くは、個人のエラーや技術的なトラブルだが、その背後には、組織行動上の問題が隠れていることを指摘し、組織体質の改善を力説された。なぜ危険性が顕在化していたにも関わらず抑止できなかったのか、管理監督はなぜゆるんでいたのか、作業能率の悪さが引き起こす危険性、背後にある組織としての焦燥感など、具体的な話に引き込まれた。質疑応答では、長坂会長、行天元会長を含め、組織のあり方、ガバナンスについてなど、積極的な議論が展開され、中身の濃いセミナーとなった。

第8回セミナー　12月1日

そんなに悪い？日本の英語教育

望月尚子　東京都立小石川中等教育学校
2003 U. of Hawaii,Manoa

望月さんは英語教育の研究のために、フルブライターとして2003年にハワイ大学で学んだ。アジアからの学生が多かったというそのプログラムでの苦しくも楽しかった経験を語ってくれた。そこで「気付きのメソッド」の有効性を得たという望月さんは、現在の日本における英語教育の問題点を厳しく指摘した。それは一方ではオーラルコミュニケーション、もう一方では文法教育に偏りがちな点であり、実際の「コミュニケーション能力」の育成という本質的な部分が抜け落ちているという視点である。フルブライターにとって英語は、自分自身の問題として重要であり、同時にアメリカ滞在中のご家族の状況は自分とどう違ったかなどという直接の経験から、参加者に論客の多い有意義なセミナーだった。

米国フルブライト・アソシエーション第29回大会報告

正野敏夫　事務局長
1962　Arizona State U.

今年の米国フルブライト・アソシエーション第29回年次大会は、モロッコのマラケシュで11月3日（金）～5日（日）、"Expression in Civil Society" をテーマに開催され、大会のプログラムと並行して "International Fulbright Alumni Development Project Technical Assistance Seminar" が行われました。このセミナーは、各国のアルムナイ活動に関する情報をウエブ上で共有し、世界中のアルムナイ相互交流に役立てようとするものです。

次の三つのテーマについて、パネル・ディスカッションが行われました。

①Preserving & Promoting the Fulbright Program
- Organizing a National Fulbright Day（コート・ジボワール）
- Advocating for Government Funding（米国）
- Supplementing Governmental Funds（日本）
- Conducting a National Alumni Survey on the Fulbright Program's Impact（トルコ）

②Serving Grantees, Alumni & the Community
- Mentoring（英国）
- Scholarships for Younger Students（パナマ）
- Reaching out Beyond Borders（韓国）
- Renewing the Fulbright Spirit（コスタリカ）

③Conversation on Best Practices
- Creating Programs that Appeal to All Generations & Broadening Participation（ベルギー・米国）
- Developing and Supporting Chapters in a Federated Organization（ナイジェリア・米国）
- Cultivating & Maintaining Strong Relationship with Fulbright Commission &U.S. Embassies（ドイツ・シンガポール）
- Creating Partnerships to Implement Programs & Events（モロッコ・ロシア）

最初のパネルで米国に続き、10月16日に行われた第31回日米チャリティ・ゴルフ大会と、6月6日に行われたフルブライト100周年記念企業・団体募金の発起人会について説明し、加えて82年、日米フルブライト・プログラム30周年を機に、当時のキャロライン・ヤン日米教育委員会事務局長と小山八郎スミスクライン・ビーチャム会長のリーダーシップのもと当時各界のリーダーであったアルムナイにより、日本の同窓会組織が作られたことを紹介しました。

パネル・ディスカッションの後、Mr.Alex Counts, President & CEO, Grameen Foundationが "Strategic Planning & Fund Raising"と題して講演しました。同氏は今年のノーベル平和賞受賞者でフルブライターのDr. Muhammad Yunus ('63 Columbia Univ.）が創設したGrameen Bankに、フルブライターとして留学し、97年資本金6,000ドルをもとにGrameen Foundationを立上げ、05年には年間予算11百万ドルにまで急成長させ、世界中のマイクロ・ファイナンス運動を支援しております。また、Martti Ahtisaariフィンランド元大統領（94-00）による基調講演も行われました。

これらパネルや講演の内容は、近く米国フルブライト・アソシエーションのサイトに公開されます。http://www:fulbright.org

02年10月の第25回以降5回の総会に参加して感じますのは、「恩返し」を活動の基本に置くアルムナイは、世界中を見渡しても日本以外に見当たらないことです。しかし日本では70年代以降日米フルブライト留学生の急減により、現在60歳以上のアルムナイ比率は70％を超えております。一方、世界で約27万人といわれるフルブライターの相互交流がますます進む中、米国、ドイツ、フランス、インド、韓国等に比べ、このままでは日本のフルブライター数減少による存在感低下は避けられません。アルムナイが募金活動による日米フルブライト留学生増加に努力する一方で、政府もフルブライト・プログラムを、日米同盟深化の観点から改めて強力に支援して欲しい、と願わずにはおられません。

東京フルブライト・アソシエーション沿革

1982	日本のフルブライト・プログラムの30周年を機に全国9地区（北海道・東北・東京・中部・京都/滋賀・大阪・中国・九州・沖縄）に、ガリオア（1949～51）を含めたガリオア・フルブライト同窓会を各地区ごとに結成
	同窓生を対象に、主に米国人招聘の目的で第一回個人募金を展開し、4,400万円余りの寄付金が集まる。またその一環として日米交流チャリティー・ゴルフ大会も始まる。
	フルブライト上院議員を招き記念の昼食会
1983	経済団体・企業を対象とする募金開始
	同窓会募金をもとにした奨学金による留学生受け入れ始まる。
1986	（財）日米教育交流振興財団(フルブライト記念財団）設立
1987	第二回個人募金により、4,600万円余りの寄付金が集まる。
1988	東京同窓会・懇親会（4/20）に、皇太子殿下（現天皇）・妃殿下（現皇后）がご臨席された。
	北陸同窓会が結成される。
1990	フルブライト上院議員来日、『フルブライト夫妻歓迎会』を開催した。
	東京同窓会主催で、新着米国人フルブライターの歓迎レセプションに、高円宮殿下・妃殿下がご臨席された。
1991	ニューヨークに『日米ガリオア・フルブライト同窓会』が結成される。
1992	日本のフルブライト・プログラムの40周年を記念し、日米教育委員会、ガリオア・フルブライト同窓会、フルブライト記念財団の共催により、アメリカ再発見旅行、全国大会（9/18、天皇皇后ご臨席）、フルブライト賞授与、記念品販売、フルブライト記念音楽祭（10/13、皇太子殿下ご臨席）、記念出版などの行事が行われた。
	第三回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
1995	フルブライト上院議員逝去
1996	四国同窓会が結成される。
	世界のフルブライト・プログラムの50周年記念行事『アジア・シンポジウム』を日米教育委員会が開催し、シンポジウムとレセプションへ皇太子殿下・妃殿下がご臨席された。
1997	第四回個人募金により、約3,000万円の寄付金が集まる。
1999	2002年のフルブライト・プログラム50周年に向けて『フルブライト公開講演シリーズ』を開始
	ガリオアプログラム50周年（1949～99）を祝い、『ガリオア50周年記念レセプション』を開く。
2001	第五回個人募金運動開始
2002	日米フルブライト・プログラム50周年を記念し、日米教育委員会、日米教育交流振興財団の共催により、記念切手発売（5/8）、フルブライト音楽祭5/9(木)、美術展示会（5/20－26）フルブライト公開講演シリーズ最終回（5/25）、レセプション（5/25、天皇・皇后両陛下ご臨席）、公開記念式典/フルブライト賞授与/シンポジウム（5/26皇太子・同妃殿下ご臨席）アメリカ再発見旅行（9/20－29、ボストン、ニューヨーク、ワシントンD.C.ほか）、記念品販売、記念出版などの行事が行われた。
	第五回個人募金により、4,000万円余りの寄付金が集まる。
2004	会則を一部変更し、名称を「東京フルブライト・アソシエーション」に改めた。(5/26)
2005	フルブライト上院議員生誕100周年記念行事として、ハリエット・フルブライト夫人が来日、東京（10/29）、京都（11/1）、大阪（11/2）で歓迎会を開催した。
2006	フルブライト生誕100周年記念演奏会を開催した。(2/4) 「フルブライト生誕100周年記念募金」発起人会を開催した。(6/6)

日米教育交流振興財団の状況
（フルブライト記念財団）

1．募金活動

（単位：千円）

冠　名	2004年度	2005年度	2006年度予算
A50	12,500	10,000	0
JEF	2,932 *1	0	0
三菱グループ	【5,000】*2	5,000	5,000
トヨタ自動車	【5,000】*2	5,000	5,000
YKK	10,000	10,000	10,000
日本航空*3	9,002	6,672	2,000
100周年記念：			
ジブラルタル生命		5,905	0
本田技研工業		5,000	0
ニフコ・ジャパンタイムズ		1,000	0
伊藤忠商事		1,000	0
野村證券		1,000	0
100周年記念（目標額）			140,000
東京チャリティゴルフ	4,807	5,437	4,000
個人募金	50	30	31,000
冨川宗次様	1,061	0	0
合　計	40,352	56,044	197,000

*1　2003年度分
*2　会計処理上未集計上取止め
*3　航空券による寄付05年度35名分

2．下記ホーム・ページにより、次の資料がご覧になれます。

http://www.fulbright.or.jp

① 寄付行為
② 役員名簿
③ 2005年度事業報告書
④ 2005年度収支計算書
⑤ 2005年度正味財産増減計算書
⑥ 2006年3月31日現在貸借対照表
⑦ 2006年3月31日現在財産目録
⑧ 2006年度事業計画書
⑨ 2006年度収支予算書

3．地区別役員等名簿

2006年6月23日開催の財団理事会・評議員会で選任された2006／2008年役員等の名簿は次の通りです。

2006/2008年日米教育交流振興財団・地区別役員等　（敬称略）

地　区	顧　問（5）	理　事（24）	監　事（3）	評議員（21）	審査委員（11）
北海道		有江　幹男	高向　　巌	熊本　信夫 小柳　知彦 関口　恭毅	曾野　和明
東　北		青木　茂之 仁科　雄一郎		高橋　剛夫 吉川　清隆 佐々木　肇	佐々木　公明*
東　京	最高顧問 大河原　良雄 渡邉　　宏*	理事長 賀来　景英 副理事長 原田　敬美 内古閑　俊二 佐藤　満秋 飯野　正子* 金田　　新* 石原　直紀*	舟橋　定之*	太田　隆次 早川　与志子*	審査委員長 五十嵐　武士* 印南　一路*
中　部		木下　宗七		千田　純一 上田　慶一	藤本　　博
京　滋	最高顧問 岡本　道雄	川又　良也 細谷　正宏*		岩山　太次郎	千葉　哲郎
大　阪	金辻　信弘	清澤　悟 牧野　信夫 松田　　武*		大津留　智恵子*	山藤　　泰
中　国		木村　榮一 隅出　昴伸		三好　啓治	祐宗　省三
九　州		稲垣　良典* 今里　　滋	吉村　徳重	林　　弘子 落合　太郎 西田　昭彦	高橋　　勤
沖　縄		比嘉　幹郎 東江　康治		川満　敏 尚　　弘子* 石川　博三*	瀬名波　栄喜
北　陸		村上　清敏*		森田　幸夫	橋爪　祐美
四　国		三木　吉治		太田　英章	

* 新任役員等

2006年度財団奨学生冠名リスト

採用者数：Fulbright Fellows (RecentB.A.)　－FF　5名
Graduate Research Fellows (GraduateStudents)　－GRF　7名
Graduate Students－Japanese　－GSJ　3名

冠　名（敬称略）	奨　学　生　名	カテゴリー	受入大学名	出身大学（最終）名
＜Americans＞				
1. 三上基金	COKER, Caitilin C.	FF	神戸女子学院大学（現代舞踏民族学）	U. of South Carolina (DanceEthnography)
2. 三上基金	DePAULO, Julie A.	FF	熊本大学（宗教学）	Ohio U. (WorldReligion)
3. 志野基金	PALESKO, Amy J.	FF	大阪大学（化学）	The Coll. of William& Mary (Chemistry)
4. TFA	TARCOV, Marianne S.	FF	関東学院大学（日本文学）	U. of Chicago (East Asian Lang. & Cult.)
5. TFA	THOMPSON, Amity I.	FF	東北大学（言語学）	Kansas State U. (History&Int'lStudies)
6. 本田技研工業	BEVILLE, RyanK.	GRF	東京大学（日本現代詩）	U.C., Berkeley (Literature)
7. トヨタ自動車	CAREY, Conan D.	GRF	名古屋大学（日本文学）	Stanford U. (Religion)
8. 三菱グループ	IRIZARRY,J oshua A.	GRF	東京大学（人類学）	U. of Michigan (Anthropology)
9. TFA	SHAUGHNESSY, Orna E.	GRF	未　定（日本文学）	U.C., Berkeley (Literature)
10. TFA	SUZUKI, Mamiko C.	GRF	お茶の水女子大学（日本史）	U. of Chicago (Literature)
11. キヤノン	WALLEY, Thomas G.	GRF	未　定（日本史）	Harvard U. (Literature)
12. YKK	WILLS, Steven M.	GRF	東京大学（江戸時代史）	Columbia U. (History)
＜Japanese＞				
1. YKK	皆川　友香	GSJ	Harvard U. (AreaStudies)	上智大学（ロシア研究）
2. ジブラルタル生命	岡　美織	GSJ	Harvard U. (Education)	慶応義塾大学（政治学）
3. キヤノングループ	眞住　優助	GSJ	U.C.San Diego (Sociology)	一橋大学（社会学）

2006年度A50奨学生リスト
採用者数：Fulbright Fellows(RecentB.A.)　－FF2名
Journalist　－J1名
Graduate Research Fellow　－GRF2名

冠　名	奨学　生　名	カテゴリー	受入大学名	出身大学（最終）名
＜Americans＞				
1. A50	GUNASEKARA, Lasantha L.	FF	神戸大学（公衆衛生学）	Cornell U. (Neurobiology & Behavior)
2. A50	THOMPSON, David E.	FF	東北大学（ロボット工学）	Kansas State U. (Electrical Engineering)
3. A50	SHAW, Jeffrey	J	琉球大学（自然保護）	U. of Oregon (English)
4. A50	ANDERSON, Emily	GRF	同志社大学（日本近代史）	U.C.L.A. (History)
5. A50	SMITH, Scott E.	GRF	東京学芸大学I（日本戦後史）	ndiana U. (EA Language & Culture)

A50/フルブライト奨学金は、2001年がサンフランシスコ平和条約締結50周年記念にあたることから、戦後日本の再建にあたって、米国から受けた様々な支援と協力に対し謝意を表すために行われた、A50事業の一環として創設されました。
「A50」の「A」はAppreciationとAmericaの頭文字であり、「50」は50周年と全米50州、さらに次なる50年を意味します。

事務局からのお知らせ

2005／2006年度中に次の方々からご著書等をご寄贈いただきました。
お礼を申し上げますとともに、会員の皆様の閲覧に供します。

三浦　昭様（1950 U. of Rochester）	「私の見た日本とアメリカ」（東京図書出版会）2006
石黒敏明様（1979 San Diego State U.）	「米国留学紀行」（リトル・ガリヴァー社）2005
太田隆次様（1967 U. of Wisconsin）	「日米雇用処遇用語集」（社会経済生産性本部・生産性労働情報センター）2005
富田岩芳様（1957 U. of Pennsilvania）	岸見勇美「ザ監査法人」（光人社）2006
富田岩芳様（1957 U. of Pennsilvania）	早房長治「企業スキャンダルと監査法人 」（彩色社） 2006
原田敬美様（1974 Rice U.）	「私の官民協同まちづくり」（学芸出版社）2006
財団法人トヨタ財団様	「トヨタ財団30年史」2006

東京フルブライト・アソシエーション
〒100-0014　東京都千代田区永田町2-14-2
山王グランドビルB135
TEL: 03-3503-1841　FAX: 03-3503-0758
E-mail: fulb@fulbright.or.jp
http://www.fulbright.or.jp

（HPは、日米教育委員会のHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。）

中央三井信託銀行
●遺言・相続 ●不動産 ●ローン ●資産運用の総合コンサルタント

遺言で財産の一部をフルブライト・プログラムに寄付したい。
相続、安心。

遺言書作成のお手伝いから
遺言書の保管、
遺言の執行まで
ご意思を確実に実行いたします。
中央三井の遺言信託

◎当社はフルブライト記念財団の「遺贈による寄付制度」提携信託銀行です。＊この制度により寄付をされる場合は下記の基本保管料が30%割引となります。

【遺言信託報酬等（消費税等含む）】（平成18年11月1日現在）
●遺言書作成時：基本保管料105,000円および保管料（年間6,300円の月割り計算）●遺言書保管中：年間保管料6,300円
●遺言執行時：遺言執行報酬（財産の相続税評価額に当社規定の率を乗じた額。但し、最低報酬は105万円。）

中央三井信託銀行　営業企画部　財産管理業務センター
〒105-8574　東京都港区芝3丁目33番1号　届出第7号
TEL.03-5232-8627

ホスピタリティ活動